

---

# 白銀の女神にごちゅうい！

ひよこだよ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

白銀の女神にごちゅうい！

### 【Nコード】

N8798P

### 【作者名】

ひよこだよ

### 【あらすじ】

電車事故で死んだ主人公は、神様の好みという事でH×Hの世界へ転生することに。主人公は幻影旅団と共に、好きな事をして楽しみます。神様にもらった能力『ヴァルキリー』のおかげで敵なしです。ヴァルキリーを知らない人でも、分かるように書いてます。自由気ままに過ごす主人公にごちゅうい！

## 第1話 はじまり（前書き）

どうも、はじめまして。

初めての作品です。読みにくいかと思いますが、よろしく願います。

## 第1話 はじまり

今日はニュースのお姉さんが言った通りになり、窓の外には雪がたくさん降ってる。

線路に雪がたくさん積ってるけど、大丈夫かな？

雪を気にしつつゲームでもしようと、鞆からゲームを出そうと下を向いたその時……

ギーギギギー……！！

「何？…ちよちよちよつと！！のわー」

変な音が聞こえると、電車が左右に揺れ始め、あっという間に横転。吊革につかまってるられなくて身体が浮いたなっ感じて…

「うぎやつ」

最後に見たのは、目の前に座ってた横綱級のおじさんが私の上に落ちてくるところでした…

気が付いたら白い空間にいました。

ん？んんん！？おつかしいな・・・たしか私って電車に乗ってたはず・・・

それでもって電車がいきなり揺れて、上から落ちてきた横綱にぶちつと

「そのとおり！あなたはぶちつと潰れちゃいました」

「ぎゃーどつから出てきたのよ！？」

「あつちのほうー！」

何！？なんか変なのが出てきたー髪のもも服も目も真っ白ー！！い

やーっ 変態や!!!

「ちよっつ 誰が変態やねん!!!」

変態がよってきた! シツシツ! あっちいけよもう

「だから変態違っつて。それに犬でもないで!」

・・・あれ?・・・ 声に出してへんのになんで? まさか思ったこと  
バレてる?・・・

「そのとうり!!! ばれてるで〜なんてっ たって僕は神様ですから!  
!! あなたは僕に選ばれたラッキー人です。というか僕好みです!  
なのでやりたい事ありませんか? なんでも願いを叶えてあげましょ  
う」

・・・黄色い救急車よんであげなあかん人か・・・

「ちがーっ! 本当の僕は神様なの!!! もうっ 普通に話してよね!  
!」

「本当に神様でなんでもありなん? 生き返れる?」  
「潰れた死体になら帰れるよv」

・・・それはないわ・・・それやったら・・・

「H×Hの世界に転生とかでも?」

「もちろん! 欲しい能力とかもつけれるよv」

「んじゃ、ヴァルキリープロファイルに出てくるの全部っていける  
?」

「もちろん 容姿は今のままでいいよね!」

「ん、念は特質系で、体力・知力は完璧で!!!」

「まっかせなさ〜い。それじゃいくよ〜」。

うわぁーすごい。身体が透けてく。それにしても神様の好みでよかった〜これで念願のヒソカやクロロに会えるかも！楽しみや！神様ありがとうございます〜

頑張っで。僕にできるのはこれくらいだけど、いつも見てるからね。あと少し。はやくこっちに帰っておいで・・・愛しい・・・愛しい・・・僕たちの女神さま・・・

## 第1話 はじまり（後書き）

原作前に転生する予定です。

ヒソカ・クロロが大好きなので、キャラを出来るだけ壊さず、出したいと思います。

## 第2話 神様ってすごい（前書き）

小説って難しいー！

読みにくくてごめんやー！！



## 第2話 神様ってすごい

「おんぎゃ〜あ〜」

転生って赤ちゃんからか。うーん、目が開かないし、動けないー。お父さんとお母さんってどんな人かな？

「何だこの髪の色は！？お前、どういうことだ！」

「そんなの知らないわよ！？」

「落ちつくんじゃ、二人とも！」

なんかいやな予感が・・・なんとか目を開けて見てみると、ダンディーな男性とお婆さんが美人な女性と言い合ってるけど、髪の色変なのかな？容姿はそのままって神様が言ってたから、黒髪のはずなんだけど・・・レオリオも黒髪だからへんじゃないはず・・・わかった！！ダンディーな人が父親で、美人な人が母親なら二人とも金髪だから可笑しいんだ！！あちゃ〜神様どうすんのさ。

あつ目があった！

「つつつ、目が銀色！？」

「どうして！？私、何も悪いことしてないわ！！」

「なんとということじゃ・・・クルタ族にこのような子が生まれようとは・・・不吉じゃ！」

不吉ってなにさ！ちよちよと何するの？

白い布に包まれて、お婆さんの手から父親へ渡される。父親は無言で家の外へ歩きはじめる。

「あなた、どうするの・・・」

「・・・族長に見せてどうするのか、決めてくる」

「わしも行こう・・・」

今から族長さんに会いに行くんだ。どうなるのかな・・・

族長の屋敷につきました。さつきから難しい顔して話し合ってます。

あつ、父親が来ました。

「すまん・・・」

あゝ、いやな予感がするよ。また抱えられて移動中・・・  
族長さん達にお婆さんも一緒に森の中を黙々と歩いてます。ここかな？きれいな泉に到着。

ちよつと！もしかして泉に沈める気！？族長たちが見守る中、父親から手を離されちゃいました。

「あうあぶーーーーー！！」

冷たーい！死ぬ死ぬ死んじゃうじゃん！神様ヘルプミーー！！！！

・・・・・・・・大丈夫だよ・・・苦しくないよ・・・目をあけてごらん・・・・・・・・

本当だ、苦しくない。それにまわりが輝いてる！うわうわすこいよ。

「なんということだ・・・泉が輝いている・・・」

赤ん坊が沈みはじめてすぐのことだ。おれの目の前で、泉が銀色に輝き徐々に凍り始めた。さらに中央に光が集まり膨らんでいく。輝きがおさまると、大きな結晶が出来上がり中にあの子がいた。あの子はもしかして、不吉なものではないのかもしれない。

「族長、あの子は本当に不吉なのでしょうか？」

「わからん、しばらくここは様子を見ることにしよう・・・クルタにとって良ければいいが」

何ということだ、こんなことは初めてじゃ。近寄ることが出来ぬ以上しかたあるまい。

少数の監視の下、様子を見ることに決まった。

その時、結晶の中の空間では再会してテンションの高くなった私と神様がいました。

「うおー神様すごいじゃん！」

「そうでしょー僕ってすごいんだ!!」

溺れることが無くて良かったけど、赤ちゃんの体じゃ何もできないじゃ・・・

「まっかせなさい。それ」

「にゃー！おっきくなつた！」

「これで大丈夫でしょ？僕はもうこれで助けてあげられないんだ・・・頑張つてね。ここから出たい時はこの扉から出られるからね」

すると何もないとこに茶色い扉が出来き、『出口』と看板がかかっている。

「ありがとう神様。頑張るから！」

「ここで能力の練習をすることをお勧めするよ。今は原作の10年前だからじゃね！」

神様はあっという間に消えていった・・・頑張るぞ!!まずは、能力の確認だね。え〜っと・・・うわっ本が出てきた。これって攻略本？なにになに、おおっステータスが出た!!アイテム・武器・防具・アーティファクトまで全部ある!マテリアライズポイントが使っても減らないし!!神様最高ありがとう!!!

これで安心してヒソカやクロロに会える。どうやら私って目の色は銀色に変わったけど、容姿は変わってないみたい。23歳のレナスと同じスタイルだし、ステータスを見ると神族になってる・・・死なないってことか。クルタ族に生まれてびっくりしたけど、ここで待ってたらクロロには必ず会えるよね。

それにしても、この空間なら神様のおかげで23歳の姿でいられるけど、外に出たら元に戻るのなんとかしないと・・・頑張るぞ！

## 第2話 神様ってすごい（後書き）

書いててわかる、かなりひどいやんな。  
ごめんやでー文才がほいいいよー

### 第3話 幻影旅団あらわる（前書き）

ヴァルキリー知らない人には分からないかも・・・  
何となく感じてください。

### 第3話 幻影旅団あらわる

空間の中で、アイテムとかの特殊変換してたらあつという間に5年がたちました。もうそろそろ来てもおかしくないんだけどな・

・  
ドゴン！！ドゴンドガン！！ドッカーン！！！！

すごい音・・・集落の方からだ。幻影旅団のお出ましかな？おお！監視役の2人って走るの速かったんだ。もう見えないや。さあ、そろそろ出る準備でもしようかな。ここから出ると元の年齢に戻るけど、もう5歳児だから大丈夫！それに、念能力使ったら大丈夫だし。

修行でだいたい分かったことは、こんな感じになりました！

<念能力>

攻略本『ヴァルキリー』を出してステータスから装備・アイテムが使える。全キャラの能力も使えるが、一人ずつしか無理。キャラの変更をする時は必ず攻略本を出すこと。設定後は攻略本をなおしても能力は続き、元に戻るときは設定しなおす必要がある。

<キャラ能力>

レナスの能力を設定した場合、身体がレナスに変身。顔は自分のままでした。レザードに設定したら身体が男になってました！！でも顔はそのまま・・・めっちゃ優男やんか。

<アイテム>

具現化して出てくる。出しっぱなしにすると、1日で消えてなくなっただけ手に持っていると、大丈夫でした。具現化したアイテムが他の人に使えるかどうかは、実験してみないと分かんないです。

なかなか楽しかった！能力使ったらキャラの年齢になれるのが嬉しいけど、性別まで変わるのはビックリ！！みんな身体が引き締まってる良いねvでも、アリューゼは無いわ・・・自分の身体がマツチヨって寒気がしたわ・・・

ザッザッザ・・・ガサガサッ！！！！

誰か来た・・・あれって父親じゃん、血だらけやけど。

「お前だけでつつつヴァアア！？」

首が飛んだー！！ビックリしたけど意外と平気かも。転生したから？って考えてたら誰か来たよ。あの人ってたしか・・・マチだ！

「これで最後・・・・・・??」

めっちゃ見られてる。そりゃ不思議だよね・・・泉が凍ってるし、結晶が浮いてるし。そろそろ出た方がいい感じになって皆来た！！

「・・・・・・どうした・・・」

「おいおい、なんだよコレ」

「うん、すごいね」

「ほうゝ凍ってるねゝ」

「・・・確かに凍ってるね」

幻影旅団が集まった、出るなら今！

出口の扉から外に出ると、扉の向こうは光があふれていた。目をつむり我慢をしていると・・・凍った泉が銀色に輝やき、結晶が華の蕾に変わり開花した。気がつくとは私は、華の上にシンプルなワンピースを着て立っていた。身体をみると5歳児。ちっちゃいわねゝでもかわいい さあ、皆に挨拶をしに行こう！



今日はクルタ族の『緋の眼』が目的だ。クルタ族は興奮すると眼の色が変わる。あの緋色はとても奇麗だ。それにシャルの情報によるとクルタ族は何かを隠しているらしい・・・少し楽しみだ。

「緋色になっっている眼は一つ残らず回収しろ・・・」

一人森の中に逃げたな・・・

「団長、私が行ってくる」

「わかった」

周囲を確認するともう全て回収できたようだ。あとはマチが追いかけて行った一人だけだ。

「行くぞ、あと一人回収したら戻る」

様子がおかしいな・・・なんだこの凍った泉は。すごいオーラの量だな。これが隠していたものか。あれは子ども？近づいてくる。まずは様子を見るか・・・

### 第3話 幻影旅団あらわる（後書き）

感想ありがとう！

コツコツ頑張ります〜

## 第4話 ホームにつきました（前書き）

やっと主人公の名前が決まりました。

## 第4話 ホームにつきました

気合を入れて、笑顔で挨拶いきまゝす。

「こんばんわ!!」

「……………」

無反応!!? 怖いってばもう……はあ、とりあえず父親と他の人たちの確認しとこかな。マチなら会話してくれそうだし。

「どうしてあの人殺したの?」

「……あんた何」

「あの人の子どもかな?」

「なんで疑問系なのさ」

「話したことないし、すぐにここに捨てられたし」

「……団長どうする?」

見てる見てる、クロロなに考えてんだか分らんわ。

「……お前、なぜ凍ってた? クルタ族なのか?」

なんでって、神様に助けてもらいました って言ったらダメだし。神様のことだけ言わなかったら大丈夫かな……後は知らないでとすすしかないね。

「私はクルタ族だけど、色がみんなと違うから不吉なんだって。だからここに捨てられたの。凍ってたのは、死にたくないから……晶石が出せるの」

「そうか……」

「クルタ族なら殺すか?」

「やめろ、ノブナガ」

「……出してみ」

「いいよ・・・あの木でいいよね。エイッ！エイッ！ヤッ！！」

右腕を目の前の木に向かって3回振り下ろして、木に晶石を撃つと木が一瞬で凍りついた。成功！うまくいって良かった、ちよっと自信が無かったからホッとした！

「これでいい？・・・」

「ああ。」

また考えてる。あつ、『緋の眼』だ。気持ちわるーっ！確かに綺麗だけど、目ん玉を鑑賞って何がいいのかわわからん。

「・・・クルタ族は俺たち？旅団 《クモ》？が殺した。お前はど  
うする？」

「クルタ族のことは別にどうでもいい・・・行くところない」

「決まりだ、連れていく」

「まじかよ、団長」

「決まりだ」

おいおいおい、あんな子どもを連れていくのかよ。はあ、しょうがねえな・・・団長も決めたら変えねーしよ。ああーっ、団長に抱っこせがんでんぞ、あいつ！！団長も抱っこするんかい！？・・・もう何でもいいや・・・

ノブナガがブツブツ言ってるけど、無事に付いてくことに成功それにしてもクロロって露出狂？腹筋が見えてるよ！ムフフvv  
子どもの身体で良かった！今は、スキンシップを楽しもうと

・・・移動中・・・

ホームに到着！流星街でした。只今、打ち上げ中です。みんな飲

んです。ウヴオーとノブナガが煩いです。パクノダさんがジュー  
スくれました、優しい！！それにしても、子どもの身体だたら眠た  
くなってきたよ・・・ってシャルナークが来た。

「ねえねえ、君っていくつ？名前は？」

「5歳・・・名前ない」

「名前ないんだ！？後で考えなよ」

「・・・うん」

「んじゃ、晶石ってどうやって出してるの？」

「・・・エイツて」

「他にも何かできる？」

「出来るよ！」

「おおー、見せて見せて」

「うん、いいよ」

ええ〜つと、『ヴァルキリー』を出すだけでいいかな？ポンつと  
出してシャルに見せると、めっちゃ驚いてる！ってみんなこっち見て  
んじゃん！？

「へー、団長！この子やっぱり念能力使えてるね」

「ああ・・・念については明日聞く。それより、プラチナは寝に行  
くぞ。付いてこい」

ええ！？もうちょっと興味もってよ！！でも、寝に行くぞって一  
緒に寝るの！？

「プラチナって君の名前、決まったみたいだね。良かったじゃん！  
ほら、付いて行きな」

「うん、ばいばい！」

トテトテトテ・・・

「かゝわいい 明日が楽しみだね。僕も一緒に聞いとこつと」

面白そうだから、みんなにも声をかけようかな？

#### 第4話 ホームにつきました（後書き）

H×Hの漫画を読みなおしています。  
みんなの口調が意外と難しいです・・・

## 第5話 念能力をみせてみる（前書き）

標準語が分からなくなってきました・・・  
ところどころ、関西弁でなまっていますが許してください。



## 第5話 念能力をみせてみる

ニャー。ネコ拾いました。

昨日、クロロの後をついて行ってる途中に黒猫を発見。近よっても逃げなかったので抱っこしてみたら懐いてくれました。かわいいよ。

クロロと一緒に寝れるのかと思ったら、お隣の部屋でした・・・ちえっ

黒猫と寝たから寂しくなかったからいいけど。名前どうしようかな？

朝になりました。

大きな部屋に行くと、旅団みんながいました。私の念能力を見に来たみたい。神様にもらった能力で驚かしてやる！

「何したらいいの？団長さん」

「プラチナは旅団ではない。俺はクロロ＝シルフル、好きに呼べばいい。他の奴は自分で聞け」

「わかった。クーちゃん」

「・・・クロロにしてくれ」

「んじゃ、この仔をクーちゃんにする。クーちゃん、もふもふ」  
「にゃーん！」

この時、クロロとプラチナの会話を聞いて団員の思いは一致。

（はあ、なんだろこの子。団長相手にマイペースすぎじゃん・・・）

何かみんながため息ついてる。それにしても、クーちゃんかわいいから、どうでもいいや

「プラチナ、本を出してみてください」

ポンツ！「出したよ」

「・・・（具現化系か？）それで何ができるか、やってみてくれ」  
「了解！」

ノリで敬礼してみました！クロロが『スキルマスター』出して  
けど、私のは神様からもらった特別な能力だからコピーできないし。  
張り切っていつてみよう！

まずは、ジェラード（14歳・魔術師）に変身。続いて、杖<ル  
ビー・メイス>を出してみる。最後にローブ<聖衣ブリタニア・ガ  
ーブ>を着たら完成。

「いきます！・・・バーン・ストーム！」

ドッカーーーーン！！

「・・・（どういうことだ？）」

「もうちょっと強くできるけど、やる？」

「ああ、やってみる」

んじゃ本を出して、10倍の攻撃力がある杖<ノーブル・ディザ  
イア>に変更したら本は直して、

「次は、10倍アップでいきます！！・・・バーン・ストーム！！」  
杖を勢いよく振り下ろしたその瞬間。

ドドドドッツツツガガアアアアアーーーーンンン！！！！！！！！！！

・・・やりすぎました、床と天井に穴があいたよ。攻撃力120  
0でこの威力なら、攻撃力20000<聖杖ミリオン・テラー>は  
どうなんの！？大魔法のイフリートキャレスなんかどうなるん！？

「や、やりすぎ？（笑ってごまかすべし!）」

「・・・プラチナ。すごい能力ではあるが、加減を覚えろ」

「はい」

「他に出来ることは？」

「・・・ノブナガみたいなのが出来るよ？」

「ノブナガ、相手をしてみてくれ」

「ええ、・・・めんどくせーな」

クロロが『スキルマスター』をなおしたってことは、やっぱりコピーするのあきらめたね。

ぐちぐち言いながらノブナガが前に出てきたから、本を出して設定を、洵（21歳・侍）に変身。倭刀<霊剣・草薙>、鎧<鏡鎧リフレックス>に変更。これで絶対大丈夫!!ノブナガで遊んでやる。

「っておい!お前、男になれるのか!?・・・何でもありじゃねーかよ」

「ノブちゃんしょうぶだ!てや~~~~っ」

「ノブちゃんってなんやねん!？」

先手必勝!!孤影斬で後ろに回り込み、双円舞を叩き込もうとしたら横へ避けられ脚が頭を狙ってきた。後ろにのけぞってかわし、脇腹に閃光斬を入れて打ち上げ、続けざまに必殺技へ。

「無限の剣閃、貴様に見えるか。神宮流剣技!千光刃!!」

「うおっ!・・・な~~~~んてな!お返した」

完全に捕えたと思ったのに!?襲ってきた一撃を胸の前で受け止めたけど、踏ん張りがきかず壁に激突・・・・・・鎧着てたから痛くなかったけど、やりすぎじゃない!?

ガラガラ壁から出て、みんなを見ると何か驚いてた。

「ノブちゃん!手加減してくれてもいいじゃない!？」

「・・・お前な、一応男になってるときにそのしゃべり方やめろよ」  
「いやです！」

ノブナガと言い合っているとクロロが近づいて来ました。

「・・・傷一つないな。一撃の威力も問題ない。だが、せっかくの技も決まらなければ意味がない。経験が足りないのと、武器に頼りすぎだ」

「そうだな、最後のは決まっていたら危なかった。経験積みばなんとかなるだろう」

「決まりだ。明日から模擬戦を中心に修行だ」

「・・・はい」

本を出して設定を元に戻して、今日はこれでおしまいだって。パクノダとマチが作ってくれたご飯を食べて、クーちゃんと本を読むクロロの横でお昼寝タイム。疲れた・・・

明日からは、旅団のみんなが修行を手伝ってくれることになりました。

## 第5話 念能力をみせてみる（後書き）

次は修行です。旅団でのマスコットの地位を主人公は目指しています。

もうすぐ、ヒソカを出そうかと思っています。

## 第6話 修行とヒソカの登場（前書き）

ヒソカをやつと出せました。

## 第6話 修行とヒソカの登場

修行をはじめて1年がたち、神様が体力・知力を完璧にしてくれたおかげで、スムーズに強くなりました。戦い方は、旅団のみんなの動きを見ただけで、すぐに出来るようになりました。

最近、皆が私の出鱈目さに呆れて修行もするけど、鬼ごっこをしたり遊んだりしてます。負けたら1つ言うことを聞くルールだから、けっこう必死に遊んでます。この前は勝って、フランクリンに肩車してもらって、背がすごい高いから眺めがよくってたのしかったです。今日は、フェイタンが遊んでくれる予定だけど何をするのかな、フェイタンって怖いんだよね。

来た来た、フェイタンが来てくれました。

「プラチナ準備はいいね」

「はい。今日は何するの？」

「ワタシが石を投げるね。全部よけるね」

「いつでもいいよ！」

「じゃあ、いくね・・・っ！！」

シュンッ・・・ヒュン・・・シッ・・・ビュン！！

「なんのこれしき！はっ・・・よっ・・・とっ・・・ほっ！！」  
「次は速くするね」

ヒュッ・・・ヒュッ・・・シュッ・・・シュシュシュシュシュッ！！！！

「はっ・・・よっ・・・とっ・・・はひふへほっっ！！」

「変な声やめるね、これでもくらうねっっ」

ヒュッヒュッヒュッヒュッヒュッヒュッヒュッヒュッヒュッヒュッ  
ッッッ！！！！

「右、右、上、上、下、下、左、右斜め後ろ45。は、ちよいとちよいと！！！！（by太公望スース（笑）」

「・・・何かム力つくね！！」

キンッキンッキンッキンッキンッキンッキンッキン  
！！！！

「フエイタン！？ナイフになってるよ！？わーーーーごめんなさい  
いいいい！ぎゃっ！？」

「・・・ふん、おやつはワタシが食べるね」

「はい、ごめんなさいでした・・・」

これからは絶対、フエイタンで遊ぶのはやめよう。

おやつはフエイタンに負けてなくなったから、クロロんとこで絵  
本を読んで、クーちゃんとお昼寝しようっと。

パクノダとマチのご飯がおいしくって幸せです。修行を頑張つて  
勝てたら、リクエストしたのを作ってくれます。昨日は「オムライ  
ス」を作ってもらいました。隣のイスでクロロも一緒に食べてるだ  
けど、意外と似合ってます。違和感ないのよね。今日は勝負に負け  
たからリクエストできなくて、ハンバーグ食べられなかったです。  
・・・残念。

明日の修行？遊び？の相手はノブちゃんです。この前は、どっち  
が大きく？円？が出来るか勝負して楽勝だったけど、明日は何の勝



負をするのかな。明日に備えて今日はもう寝よう。クーちゃんいくよ。

はい、次の日の朝になりました。

朝ごはんも食べて、準備OK！

修行をする部屋でノブナガを待ってます。おっそいな寝坊？

「やあ？なにをしているんだい？」

「！！・・・（ビックリした！！）」

出た出た出たー！ー！ー！っ、ヒソカ登場じゃん！！初対面だから知らんぷりしないよね。

「・・・だれ？」

「ボクは、ヒソカっていうんだよ？君の名前は？」

「プラチナっていうんだ。ヒソカは何しに来たの？」

「ボクは旅団《クモ》の4番になったんだ？」

隣に座ったと思ったらジワジワ近寄ってくるんですけど・・・嬉しいけど近い近い近いってば！！誰かヘルプミー！ツツ、あつノブナガがめっちゃ走ってきた。ノブちゃん！何とかして！

「ヒソカー！ーっ、プラチナから離れろってんだ！」

ヒソカがノブナガに気を取られた瞬間に、ノブナガの後ろに隠れるのに成功。嬉しいんだけど、いきなりは心の準備がね。

「残念？君面白いね？」

「さっさと行け！！！」

「怖い怖い？またね」

「・・・バイバイ」

やっぱりヒソカって変態チックやね。服装とかしゃべり方とか。

「おい、プラチナいいか。あの変態ピエロには気をつけるよ？まあ、お前なら襲われても返り討ちにできるから大丈夫だとは思っけど、本当に気をつけるよ？」

「うん、わかった」

ノブナガって心配性？過保護？似合わないな

「今日は何の勝負をするの？」

「試合だ、参ったって言った方が負けだ」

「んじゃ、コインが落ちたらスタートね！」

「おう！」

結果は、私の勝ちー！ボロボロになったけど。けっこう能力使わなくても大丈夫になってきました。まあ、ノブナガって優しいから手を抜かれている気がしないでもないけど。それに能力フルに使ったら瞬殺できるし。

今日こそ、パクノダとマチに「ハンバーグ」作ってもらおうと

## 第6話 修行とヒソカの登場（後書き）

次は、旅団のお仕事に付いていきます。

## 第7話 お仕事参観日（前書き）

読んでくれて、ありがとうございます！

## 第7話 お仕事参観日

ヒソカが皆に嫌われぎみです。変態だから？変態だからだよ。だって成人男性が語尾に？とかピエロの格好とか普通しないもんね。皆が皆、ヒソカには気をつけるっていうけど意外と話すと楽しいよ？クッキーとかケーキとかキャラメルとかアメとかチョコとかくれるし。

旅団の皆さんよりコメント

（えっ、いつの間にか餌付けされてたの！？プラチナつつっ大丈夫か！？）

バラバラバラ〜、ヒソカのトランプタワーが崩れました。

「やったー。ヒソカの負け！今日は何くれるの？」

ヒソカに向かって手を出すと、ほほえましい顔で見られちゃいました。笑顔もいいけど何かちようだいってばもう。拗ねて晶石撃つぞコラ。

「残念？う〜んそれじゃコレをあげるよ？」

「トランプ？ヒソカがいつつも使ってるやつだね、いいの？」

「ボクは新しいのを買ったからね？」

「それじゃ、ありがとう」

「どういたしまして？もう一回どう？」

「タワーより、この前したトランプと晶石の撃ち合いがしたい！」

「いいよ、リベンジだね？」

遊んでたトランプを片付けて、ヒソカから10mほど離れて立って深呼吸。前は50枚中3枚、撃ち損じたから今日こそは全部撃ち落としてやる。

「はじめは50枚、出来たら100枚いくよ？」

「・・・お願いします」

シュツ・・キインツ・・シュシュシュシュツツ・・キキ  
キキキイイインン！！！！

「おみごと？それじゃあ、100枚いくよ？」  
「おう！！」

シュシュシュシュツツシュシュシュシュツツシュシュ  
ユシュシュシュツツツ！！！！  
キイキイキイキイキインンツツキイキイキイキインンツ  
ツキキキイイイインンツツ！！

「うん、完璧だね？」  
「よしっつ、今日はクリームシチューにしてもらおっと それじゃ  
ヒソカバイバイっ」  
「またね？」

パクノダとマチが部屋にいない・・・リクエストできない。早く  
言わないと作ってもらえないのに。

「にゃ〜ん」

「なあにクーちゃん。ふんふん、皆集まってるんだ。ありがとう〜」

クーちゃんはなんと？念？で文字が出せるスーパー猫になったの  
です。理由は簡単。『ヴァルキリー』で具現化したアイテムが自分  
以外に使えるかどうか、回復アイテムの？エリクサー？を出してボ  
ーっと考えてたら、クーちゃんが飲んじやいました。その日は何も  
なかったんだけど、次の日、本を読んでだクロロがクーちゃんを抱  
っこして？念？が使えているのに気が付きました。驚いたけど文字  
でお話ができるようになって良かった

アイテムの実験はクロ口でした。感想は「元気になった、効いてるな」だって。冷静な奴め。

そろそろ皆がいる部屋に到着です・・・あれ？珍しく旅団が全員集合してるよ。

「ちようどいいところに来た。今日の仕事にはプラチナも一緒に付いてこい。そろそろ仕事の雰囲気を知ってもいいだろう」　byク  
ロ口

「・・・足手まといなら怒るね」　byフェイタン

「お前なら大丈夫だろ」　byノブナガ

「心配ないよ、私達といたらいい」　byマチ

「？」　byヒソカ

・・・いきなり言われて驚くじゃんか。

「プラチナはオレと一緒にだ。雰囲気がつかめればそれでいい、行くぞ」

「「「おおーっ！っ！」」」

ターゲットの大きな屋敷が見えるポイントに着きました。シャルナークが警備隊の情報を話してます。

「警備に雇ってるのは60人ほどだよ。うち5人が念能力者だね、今日も楽勝だ」

「念能力者が何処にいる？」

「そこまで情報が無いよ」

念能力者が何処にいるか知りたいんだよね。『ヴァルキリー』を出して設定変更、レナス（23歳・アース神族）に変身、アイテム？天空の瞳？と？エネミー・サーチ？を具現化。

「プラチナ、何をしている」

「もうちよつと待って、念能力者の位置がわかると思うから」

「？天空の瞳？で屋敷の地図を出して、レナス専用アイテム？エネミー・サーチ？で敵の位置を特定。さらに念能力者の位置を特定。攻略本をクロロに見せると、頭を撫でてくれました。」

「便利だな・・・これからは敵の位置把握を任せる」

「はい」

「念能力者は入口に2人、奥の隠し部屋前に3人だ。行こう」

お仕事の感想は、屋敷の人たち弱すぎ！！侵入して7分で終わって何！？回復薬なんか必要なかったじゃん、残念。みんな驚くと思ったのに・・・怪我しないのは良いことなだけだし、つまらないや。

・・・視線を感じる、ヒソカからだ。ええつつ、自分で腕に傷つけてるよ！？

「腕、いたいなあ？」

「・・・？エリクサー？どうぞ」

ゴクゴクゴク

「はああああ～～～～、効くねええ？ありがとう、プ・ラ・チ・ナ？」

「ひいつつつ、どういたしましてつつ」

ヒソカのことはいやいやじゃないけど、あの反応は変態すぎでムリ！！

パクノダとマチが料理してくれたクリームシチューを食べながら、クロロにヒソカのことを話したら「バカだろ」って言われました。そうだよ・・・パクノダにマチ、クーちゃんも慰めてくれます。次は気をつけよう・・・



## 第7話 お仕事参観日（後書き）

次は、クーちゃんと外にお出掛けの予定です。  
お楽しみに。

## 第8話 クーちゃんとおでかけ？（前書き）

旅団は過保護になってもらいました。

## 第8話 クーちゃんとおでかけ？

修行もないし、お仕事もないし暇です。クロロに遊ぼって誘っても念字で？一人で遊んでろ？って、本から目も離さず返事するから・  
・晶石撃ってやったら窓からほり投げられた。クロロのケチ！

「暇ーヒマーひまだよー」

「暇なのかい？ボクとデートに行こうか？」

「っっっ、？絶？して後ろに立たないでー！」

「ふふふ？驚く顔がたまらないねえ？」

「デートしないもんね。マチが怒るし」

「残念？ヨークシンにおいしいケーキ屋さん見つけたのになあ？」

「ケーキ屋さん！？」

「ボクと行ったら食べ放題だよ？」

「食べ放題……」

ヒソカとデートしたらマチが怒るけど、ケーキ食べ放題もすてがたい。どうするべきか……！そうだ、ヒソカと行かずにクロロにお金もらって行ったらOKじゃん！そうと決まれば急がないとね。  
「ヒソカまたねー」

「あらら残念？……なんてね？」

ゾワアアツッ！！何か寒気が……。そんより私のケーキさん待ってて！全部食べるから！！

という事で、クロロから無理やりおこずかいもらってると、パクノダもくれました。マチはウサギのリュックを作ってくれました！もふもふでカワイイの

初めてのお出掛けだから、3人から約束事を言われました。

？知らない人に付いて行かない

？知らない人にお菓子をもらわない

？怪しい人に声をかけられたらても無視すること

？人を殺す時は裏路地ですること

？お金が無くなったら盗ること

クーちゃんもいるから大丈夫って言ったら、微妙な顔をされました。何で？

3人と一緒にお出掛けの準備してます。『ヴァルキリー』から？聖衣ブリタニア・ガーブ？と？聖皇后のティアラ？を出して装備したら完璧、誰に襲われても怪我をする心配はないね。ウサギさんリユックにおこずかいを入れて背負って、フードを深くかぶった上にクーちゃんを乗せたたら準備おしまい。

「プラチナ、念の為にこれも持って行け。小型だから今のお前にも使えるだろう」

クロロがしゃがんでロープをめくって、皮のケースに入った小型ナイフをベルトに通して腰の後ろに着けてくれました。

「これなあに？」

「ベンズナイフだ。毒が塗ってあるから気をつけて使っただぞ」

「はい、そろそろ行くね」

「飛行船乗り場まで送ろう」

飛行船乗り場に着きました。あと20分ほどで出発するみたい。それにしても……

「はい、プラチナ用の電話。困ったことがあったら電話しなよ？」

byシャルナーク

「変なもん拾って食うなよ？」 byノブナガ

「土産は酒でいいからな！！」 byウボオーギン

「殺す時に拷問すると楽しいね」 byフェイタン

「怪しい奴いたらぶん殴れよ？」 byフィックス

「おなか出して寝るんじゃないよ」 byマチ

「ケーキばっかり食べないのよ？」 byパクノダ

「楽しんで来い」 by フランクリン

「・・・はあゝ（旅団はいつから過保護になった？）」 by クロロ  
皆が見送りに来てくれました。クロロは溜息ついてるけどね。

「はゝい、ちゃんと約束も守るから大丈夫！！行ってきます」

「にやゝゝん（いつてきます）」

「」「」「気を付けろよ！！」「」「」

約束って何だ？プラチナが飛行船に乗る前に言ったのが気になるな、マチなら知ってるだろう。

「・・・おいマチ、約束つてのはなんだ？」

「ああゝ、カクカクシカジカって事よ」

「ぶぶうつつ！！なんだそりゃ！？お前ら過保護すぎだろー」

「・・・・・・・・（殺気）」

「つつつつ、何でもありません！」

おおゝ怖っ、これからこの手の冗談はやねえーとな。心臓がいくつあっても足りねえーわ。

ヨークシンに到着！ケーキ屋さんがある通りまでは親切なお姉さんが教えてくれました。

何処のケーキ屋さんか美味しいのかな？とりあえず、このカワイイお店にしようつと。

ムシヤムシヤムシヤムシヤムシヤ、パクパクパクパクパク  
パクパクパクパク

「おいしい！！クーちゃん、おいしいね」

「にゃんにゃん（おいしいね）」

「全部食べたから次行くよ、クーちゃん！」

「にゃー（りょーかい）」

4件目のお店で44個目のケーキを食べています。

「クーちゃんこのイチゴの酸味と桃の甘さが丁度いいね！ハグハグハグハグっっ」

「にゃにゃにゃにゃにゃにゃん（このパイのサクサク感がたまらないにゃ）ハグハグハグっっ」

「……食べすぎじゃないかい？お腹はどうなってるのかな？」

「これくらい大丈夫だね、クーちゃん」

「にゃんにゃー（大丈夫にゃ）」

「へえ、すごいね？」

「えへへ、それで……へっっ！？なんで此処にいるの！？」

「ふふふつ、気付くのが遅いよ？」

目の前のイスに、ヒソカが座ってコーヒーを飲みながらこつちを見てるよ。

「何でいるの？」

「たまたまだよ？」

「……あやしい、にゃー（あやしい）」

「それより、食べなくていいのかい？」

ピエロの格好した人と一緒に食べてたら目立つじゃんか。今日はもう諦めて、明日にしよう。今食べてるケーキを食べ終えて、クーちゃんを頭に乗つけて席を立てレジに行くとヒソカもついて来た。横からサッとお金出して私のケーキ代を自分のと一緒に払っちゃったよ……絶対何かある！！

「今日はボクのおごり？お礼に明日、天空闘技場に来てくれないかな？」

ほら、やっぱり何かあったじゃん。天空闘技場ってあそこに見える高いビルだね。戦ってお金貰うところ。まさか……出ろって言わないよね。お金は盗った方が早いし……それに、ヒソカ

と戦うのめんどくさいし、ヒソカ以外なら弱すぎると思うし。

「とりあえず、何で？」

「ボクが出るからさ？」

「それだけ？」

「ボクと戦ってくれるのかい？」

「それはイヤ！・・・何時に行けばいいの？」

「１１時？約束だからね？」

見るだけなら良いかな。それにヒソカが誘うんだからきつと楽しい事があるはずだしね。んじゃ今日はクッキーを買ってホテルに戻ろうかな。晩ご飯を食べるならホテルの方が美味しいはずだし。

## 第8話 クーちゃんとおでかけ？（後書き）

読んでくれてありがとうございます！

次は、ゾルディック家の誰かに会えたらなっと思ってます。



第9話 クーちゃんとおでかけ？（前書き）

キルアはまた今度。

ゴトーさんが好きです。

## 第9話 クーちゃんとおでかけ？

約束の11時になりました。初めて天空闘技場に入ったけど、すごい人です。

《ポイント&KO戦！！時間無制限一本勝負！！》

おお、始まるみたいだね。てかヒソカの相手が誰だかわかんない。ちよこまかちよこまか動いてるから名前はサル吉に決定！それにしてもサル吉移動ばつかで攻撃してないじゃん。勝負なんだからヒソカのこと殴りに行かなきゃダメでしょ。

「んゝ、そろそろボクから行くよ？」

ヒソカが動いたね。サル吉の正面に移動して顔面殴った！！ふっ飛んだと思ったらサル吉ヒソカのところに戻って行ってるよ。あれは、ビヨンビヨンするヒソカの？念？だね。サル吉が何か出した！あれって小太刀だ。勢いを利用して袈裟切りをしようとしてるけど・・・避けられるでしょ普通。ほらやっぱり、避けられた。・・・つまらない。何が楽しいんだか。

その後サル吉は、ヒソカにヨーヨー見たいに遊ばれて場外にさよならでしたとさ。

「やあ、プラチナ？」

「来てって言うから来たのに、さっきの何！？面白くなかった」

「にゃー（サル吉弱すぎにゃ）」

「（サル吉？）予定はあるかい？ボクは友達に会いに行くんだけど一緒にどうだい？」

「友達は面白い？」

「変わった友達だよ？」

「じゃー行こうかな。どこに行くの？」

「お楽しみ？」

という事で、ヒソカの友達に会いに行くことになりました。

ヒソカに友達いたんだ・・・もしかして類友じゃないよね。ちょい不安だな。

《皆様本日は号泣観光をご利用いただきまして、誠にありがとうございます》

《早速ですが、デントラ地区が生んだ暗殺一族の紹介をしていきましょう・・・うんたらかんたら》

はい、類友決定！。暗殺一族に友達がいるんだね。

「ほら、もう着くよ？」

「クーちゃん着くつてさ」

「にゃー（ひまー）」

ここがゾルディック家ね。本当に門がめっちゃ大きいです！ヒソカが入る見本を見せてくれました・・・6まで開けたからびっくり。だって自力だったんだよ！？負けたくなかったけど、3までしか開きませんでした。悔しいーーーーー！！

「拗ねた顔もカワイイね？」

「拗ねてない！！」

あつという間に到着。ゴトーっていう執事さんが部屋まで案内してくれてます。

「ありがとうございます、ゴトーさん」

「いいえ、お気になさらず。どうぞお入りください」

ああっ、イルミがお茶飲んでるよ。

「ヒソカその子なに？」

「クロ口達と暮らしてるプラチナだよ？プラチナ、彼はイルミっていうんだよ？」

「はじめまして、プラチナです」

「ふーん、よろしく。座って食べたらず？」

「良いの？いただきます」

意外とやさしい。イルミの前にヒソカと座り、紅茶と一緒に用意されたケーキを食べてるとヒソカが自分のケーキをお皿ごと渡してくれます。

「くれるの？」

「すきでしょ？」

見直したよヒソカ！あなたは良い人だね。ハグハグハグーっっ  
ヒソカの分を食べ終わったとき・・・イルミもケーキをくれました  
た！！

「ゆっくり食べなよ、もつと持って来させるから」

「ハグハグっつ、ありがとう！クーちゃん食べないの？」

いつもなら一緒にケーキを食べるクーちゃんが、頭から降りてヒソカとの間に座ったまま動かない。

「どうしたの？」

すると前と横から笑い声が聞こえてきた。

「ふふふ？無理だと思っよ？」

「何で？」

「それ、毒入りだから・・・」

毒入り？毒入り！？毒入り！！3つも食べた後なんですけどー  
ー！！あつ、？聖衣ブリタニア・ガープ？が無効化してくれてるんだ。

「にゃーにゃにゃ（ぼくもたべたいのにー）」

「クーちゃん気付かなくてごめんね。ちよつと待っててね」

『ヴァルキリー』から毒回復アイテム？バニツシュ？を出して、  
ケーキに振りかければこれで大丈夫。

「クーちゃんもう大丈夫だよー」

「にゃーん（プラチナ大好きー）」

ハグハグハグハグハグハグ~~~~っつっ

「今のは念能力だね、初めて見るタイプだよ」

「面白いだろ？」

ケーキを食べ終わってヒソカを見たら、もう用事は終わったんだってさ。速いね・・・それに、ホームに帰ろうかだってさ。別に他にする事ないから一緒に帰ろうかな。

ゾルディック家の門までイルミと一緒に来て、赤いスカーフをくれました。どうしろと？って見てたら、ウサギさんリュックの首に巻かれて「カワイイよ」だってさ。イルミはカワイイのが好きなのかな？

「油断も隙もないね？」

意味わかんない。

ホームに到着！私は帰って来たー！！！！

さっそくクロロに会いに行きます。何してたのか話したら「変態にも気を付けろ」って言われました。私もそうだと思います。ゴメンネ。ウサギに付いてる赤いハンカチは「・・・大丈夫だろ（発信器だな）」だってさ、何が大丈夫なんだろうね。

みんなへのお土産はゾルディックワイン・ゾルディックビール・ゾルディックジュースを買いました。好評で良かった。今日は久しぶりに皆でご飯を食べました。なんかみんな喜んでるけど何かあったのかな？

く祝！はじめてのおでかけ成功く

プラチナは気付かないだろうな、今日の宴会のテーマに・・・旅団も平和なったもんだ。byクロロ

## 第9話 クーちゃんとおでかけ？（後書き）

次は、ハンター試験の予定です。

## 第10話 ハンター第一次試験だよ？（前書き）

やっぱり小説って難しいです。

## 第10話 ハンター第一次試験だよ？

お出掛けから帰ってきて、1ヶ月たちました。

今は、ヨークシンのデパートで買ったお昼寝用のイチゴケーキクッションで、クーちゃんとクロロの隣でお昼寝を楽しんでいます。本をめくる音が微かに聞こえたり、たまにクロロが頭を撫でてくれたり・・・ほのぼのしてたら邪魔者が来ました。

ようこそ変態さん。

「やあ？そんなに睨まないでよ？」

「にゃーっ！！（変態撲滅月間！！）」

「クーちゃんに賛成！」

「・・・ヒソカ、何をしに来た」

「「無視された、にゃんにゃ（スルーだ）」」

「今年のハンター試験、プラチナもどうかなと思ってね？」

ハンター試験ね。ヒソカって去年のハンター試験面白くないからって、試験官を半殺しにして帰って来たんだよね・・・付いて行ったら絶対遊ばれる気がする。一人で行ってもらおう。

「嫌です！ホームから出ないもんね」

「ハンターになれば便利だよ？ねえ、クロロもそう思うだろ？ボクと一緒に安心だしね？」

「・・・（プラチナは嫌がってるな）」

必死に目でクロロに訴えてる最中です。キラキラうるるビーーーム！！！！

「・・・諦めろ、ヒソカと一緒に受験してこい」

「決まりだね？明日の朝に出るから準備しておきなよ？」

「クロロのバカ、バカ、バカ。にゃー（おでこばか）」

「・・・絶対に行つて来い」

という事で、ハンター試験を受験することになりましたとき。無念。



「ハンター試験を受験するにあたっての、お約束」 by 幻影旅団

？変態に気を付けること

？念能力で変身は出来るだけしないこと

？試験官は殺さないこと

？知らない人に食べ物をもらわないこと

？おやつは計画的に食べることに

クーちゃんとお出かけした時も約束をしたので、今回もちゃんと守りたいと思います。

準備はいつものように、パクノダ・マチ・クロロと一緒にしました。

今回の装備は、？聖衣シルフ・レッド？？聖皇后のティアラ？？スエード・ブーツ？？ヒール・ピラス（自動的に回復）？？レジスト・チャーム（異常にならない）？です。・・・やりすぎじゃね？ちなみに、クーちゃんには？手織りのバンダナ（毒無効）？を装備させました。

ウサギさんリュックには、パクノダがつくってくれたクッキーが5袋とマチがくれたアメとチョコが入ってて、クロロにもらった小型のベンズナイフは腰にあります。フードをかぶってクーちゃんを上に乗せたら出来上がり！

「プラチナ、行くよう？」

「はい、にゃん（はい）」

「・・・約束忘れるなよ！・・・」

定食屋に到着。

「いらっしえーい！！ご注文は？」

「ステーキ定食？」

「焼き方は？」

「弱火でじっくり？」

「あいよー、お客さん奥の部屋にどうぞー」

「メロンクリームソーダもお願いします！」

「プラチナ、ダメだよ？」

「はい」

お肉食べてたら会場に着きました。ヒソカは44番で、2人組が入ってきたから47番になりました。

「ボクは向こうにいるよ？」

「わかった、またね」

周りをキョロキョロしてたら、赤鼻が近寄って来た！あんな奴と話したくないから逃げるもんね。

到着してから1時間・・・んん？すごい人が来たよ。あんなに針いっぱい刺して痛くないのかな？あつ、ヒソカと話してる。ヒソカの知ってる人なんだ！聞きに行こうつと。

「こんにちは、ヒソカの知ってる人？」

「誰だと思う？」

「カタカタカタカタ」

「にゃーっ（わかったー）」

「・・・もしかして、イルミお兄ちゃん？」

「正解、でも今はギタラクル」

「ギーちゃんね」

「・・・ギタラクル」

「にゃん（ギーちゃん）」

「諦めなよ？」

という事で、ギタラクルはギーちゃんになりました。

さらに2時間たちました。

最近では原作知識がだいぶ薄れてきて不安だけど、この世界に馴染んできたって事なのかな・・・。

チン・ウィーン

3人組で主人公の到着。楽しい試験の始まりやね。

シリシリシリシリシリシリシリシリシリシリ

「ただ今をもつて、受付時間を終了いたします。では、これよりハ  
ンター試験を開始します」

やっぱり一次試験は走るだけやねんね。とりあえず、サトツさんの近くを走っとこかな。

・ゴンとキルアの後ろを走ってます。話しかけるきっかけがないかな・

「いつの間にか先頭になっちゃったね」

「うん、だってペース遅すぎなんだもん」

・  
・  
・  
たしかに遅いよね  
・  
・  
・

「にゃんにゃんにゃんにゃんにゃんにゃんにゃんにゃんにゃん」

クーちゃんがさつきから唄ってくれてる。もしや、きっかけをつくってくれてるのかな。

「ねえねえ、その猫力ワイイネ。なんていう名前？」

「猫が唄ってるし……」

「（さすがクーちゃん！ありがとね）・・・この仔はクーちゃんだよ」

「へえ、クーちゃんって言うんだ。オレはゴン！もうすぐ12才なんだ」

「オレはキルア。」

「私はプラチナ、10才だよ。よろしく」「にや（よろしく）」

「うん、頑張ろうね！」

クーちゃん残念でした。念文字わかんないみたいだよ？

「今度さ、クーちゃん抱っこさせてくれる？」

「良いけど、ひっかいたらごめんね」

「大丈夫、楽しみにしてる！」

という事で、ゴンと約束をしたけど・・・それより早く終わんな  
いかな。やっと階段の出口が見えてきたよ。なんかヒソカがそわそ  
わしてきてるなあ。大丈夫かな？

**第10話 ハンター第一次試験だよ？（後書き）**

明日は出かけるので、だぶん更新できません。

**第11話 ハンター第一次試験だよ？（前書き）**

プラチナは意外と残酷好き。  
だって育てたのは旅団ですから。

## 第11話 ハンター第一次試験だよ？

ヌメーレ湿原についてサトツさんが説明してます。騙されたら死にますよだって。

「そいつは偽物だ！本当の試験官じゃない！！ヌメーレ湿原に住む人面猿が化けてるんだ！！」

人面猿を引きずって着た人が騒ぎはじめ、受験生たちに自分こそが本当の試験官だと話しはじめる。話を信じはじめた一部の受験生が戸惑いを見せ始めたその時。

シユシユシユン！！・・・ギヤアーツ

「なるほど、なるほど？　これでどっちが本当の試験なのかわかったね？」

あゝあ、殺っちゃった。注意しただけじゃヒソカは反省なんかしないのに。サトツさんの代わりにビシツと叱つといてあげようかね。湿原を走り始めてから？絶？でヒソカの後ろに回り、肩に跳び乗って髪の毛をつかみひっぱってみました。

「ヒソカ〜〜、サトツさんに迷惑かけちゃダメでしょ！」

「分かってるよ？　プラチナ、霧が濃くなったら遊びを始めるんだけど、一緒にやらないかい？」

「どんな遊びなの？」

「試験官ごっこ？サトツのお手伝いだよ？」

サトツさんのお手伝い・・・どうしようかな。霧が濃くなってるから、後ろから順番に殺してただけだから簡単だよ。クーちゃんはどうちでも良いみたいだし・・・

「ちよっとだけでも良いよ？」

「じゃ、ちよつとだけする」

「にゃんにゃ（皆殺しだー）」

「それも良いね？」

「ダメでしょ!？」

試験官ごつこをすることにした2人と1匹は、霧が濃くなるともに受験生の最後尾に移動し始めた。プラチナはヒソカに肩車をしてもらったままで、降りる気はない無いようだ。

「始めようか？」

「おう!」「にゃん（頑張つて）」

ヒソカは受験生たちがけてトランプを投げ、プラチナは晶石を顔面に狙い撃ちはじめた。

トランプは目や口、首に刺さってはいるが死んではないヒソカに比べ、プラチナが撃った晶石は、顔面に風穴があき、傷口から凍りはじめ最後は首から上が砕け散っていった。

「ぎゃー、やめてくれ!!」

「そう言われるとね・・・サービスしたくなるの」

プラチナは逃げる受験生の両腕を狙って晶石と撃った。

「お、俺の腕があああー」

両腕が指先からジワジワと砕け散っていく・・・受験生が叫んでいると晶石が脇腹を貫通。傷口が一瞬で凍りつくために受験生はまだ走って逃げるが、両目に晶石が刺さり頭部が弾け飛んだ。

「さすがプラチナだね？」

ヒソカの一言がさらに恐怖を与え、フードを子猫が押さえているので顔は見えないが、弧を描いて笑う口元が見えるだけで少女は不気味な雰囲気醸し出していた。

この時、最後尾を走っていたグループには2人が死神に見えただろう。



「にゃーうにゃんう！（ヒソカ14人、プラチナ17人。プラチナの勝ち！）」

「よしやー！！」

「残念？」

「んじゃ先にもどってるから」

ヒソカの頭から降りて先頭目指して走っていると、ゴンがレオリオに前に来た方がいいって言ってるけど、その通りかもね。だってヒソカはまだ殺る気満々だもんね。

予想通りヒソカが後ろで殺りまじめ、レオリオの声を聞いたゴンは後ろに走っていった。キルアはゴンを見送り、プラチナはギタラクと走り何もなく2次開場に到着。ギタラクはヒソカに電話をし、2次会場の場所を教えて、ヒソカが来るまでの間プラチナにクツキ1を4枚もらって食べていた。

しばらくすると、ヒソカが人面猿を連れて戻ってきたので、晶石を撃とうとしたらレオリオだよと言われ、よく見たら本当にレオリオだった。驚いていると2人が笑って見てくるから、ちよつと離れてやる。

2次試験は正午から。拗ねて1人で待っていると、キルアとゴンが近づいてきた。

「プラチナー、クーちゃん抱かせてくれる？」

「いいよ、クーちゃん」

「にゃ（イヤ）」

「痛つつ、ひっかかれちゃった・・・」

やっぱりダメでした。クーちゃんはゴンが嫌いみたい。

「にゃ（キルアはスキ）」

「うわぁ、オレに懷いて来た」

「キルアは好きだって」

「オレ動物に嫌われたのはじめてかも・・・」

「ごめんね、クーちゃん好き嫌いあるから」

キルアに懷いたのは血の香りがするからかな。クーちゃん血の香り好きだもんね。というか、血の香りがしない人に抱かれたのってゴンが初めてかな。旅団の皆にヒソカ・イルミ・キルアって皆血の良い香りがしてるもんね。

ゴンがショックを受けていると、2次試験開始時刻になりました。プラチナはヒソカ・ギタラクルの所に戻る。そわそわしていると、ギタラクルがプラチナの頭を撫で撫で・・・

「大丈夫」

「大丈夫だよ？」

2人に声をかけてもらって落ちついたプラチナは、だんだんと開いていく扉を見ながら頷いた。

**第11話 ハンター第一次試験だよ？（後書き）**

次は、第2次試験です。

第12話 ハンター第二次試験だよ（前書き）

さらっと流しました。

## 第12話 ハンター第二次試験だよ

扉が開くと、ソファーに座った女性と後ろに立った男性の2人が見えた。

2次試験の試験官は2人で、両方とも美食ハンター。試験内容はまず、男性が出題する料理を作り合格すること。合格者だけが女性の出題する料理を作る事が出来、合格者が2次試験通過となる。

「オレの出題する料理は、豚の丸焼！オレがお腹いっぱいになったら終わりだから」

「2次試験開始！」

プラチナが森に入って行くと、グレイとスタンプが暴走して来た。突っ込んできた豚の頭に回し蹴りが決まる。豚は吹っ飛び、木をなぎ倒して絶命。

焼くだけなら出来るもんね。フェイタンと一緒に人を火炙りにした事があるから簡単だね！

焼いた豚を持って行き、食べてもらって無事に合格出来ました。

「終……了……！！」

70頭の豚完食、男性の料理審査では70名が合格。次は、女性の出題する料理。

「私が出題する料理は、スシよ！！ヒントはこの中にある、最低限必要な道具と材料よ。スシはスシでも、ニギリズシしか認めないからね。料理開始！！」

「ヒソカー、ギーちゃん。スシって食べた事ある？」

「ないよ？」

「・・・お腹すいた。にゃんに（ゴハン）」

「ここに豚がある」

「焼き豚ー！！」

という事で、3人と1匹で焼き豚を食べていると試験が終わってました。

再試験は、ゆで卵をつくる事になりました。

ゆで卵大好きー！！っていうか、会長がいつの間にか来てたよ。

飛行船で山の頂上に行き、女性の試験官が見本に崖を飛び下りてを取ってきました。

「簡単だね！」

「そうだね？」

クーちゃんを頭に乗つけたまま崖にダイブ。ゆで卵は好きだから、ひと房全部とっちゃいました。3つはクーちゃんと食べて、残りの5つはウサギさんリュックに入れといて後で食べようっと。

「2次試験終了、合格者42名！！」

飛行船に乗って3次試験会場に移動するんだって。到着は明日の朝8時くらいで、今はまだ夜の9時。何しよかなって考えてたらゴンとキルアがやってきたよ。

「プラチナも一緒に探検しようよ！」

「行こうぜ」

「うん、にゃー（キルア）」

「うおっ」

クーちゃんがキルアの頭に移動しちゃいました。ゴンと一緒に、あわてるキルアを笑って探検ヘレッツゴー！まずは、夜景を見に行く事になりました。

「うわーすごいなー」

「見る！人がゴミのようだ！！にやにやにやー」（ゴミのようだー）」

「……プラチナ大丈夫か？」

「いいの、言ってみただけだから」

3人と1匹で夜景を見てたら、ゴンがキルアに家族の事を聞きはじめました。

「オレの親、両方とも殺人鬼だぜ」

「そうなんだ」

「にやー（だからスキ）」

「プラチナは？」

「死んだよ」

「……そうなんだ」

「キルアはどうしてハンター試験受けたの？」

ゴンが話を変えて、キルアの話を知っていると会長がやって来ました。

「ワシとボール遊びせんか？」

「やる！」

会長嫌いだし、ゴンのテンションにも疲れたし、そろそろヒソカのところに帰ろうかな。

「私は寝るからやめとくね、ばいばい」

キルアからクーちゃんを回収して、2人とはお別れました。

広場に戻ると、ヒソカがランプを崩して1人で笑ってたよ……変態さんだ。皆との約束？番は、変態に気を付けることから近寄らないでおこうつと。でも、ひとりじゃ寂しいからギーちゃんの隣で寝ようかな。明日も楽しかったらいいなあ

朝になって目が覚めると、ヒソカ・私・ギーちゃんの順で寝てましたとさ。

ちなみに、クーちゃんはヒソカのお腹の上で寝てました。

「ギーちゃんよりヒソカが好きなの？」

「にゃ〜んにゃ（だって、ギーちゃん今キモイ）」

「!?!?」

クーちゃんの念字にショックを受けた様子のギーちゃんってカワ  
イイね。

さあ、そろそろ到着です。3次試験もがんばるぞー



## 第12話 ハンター第二次試験だよ（後書き）

次は、第3次試験のトリックタワーです。  
1人で行く予定です。

### 第13話 ハンター3次試験だよ

予定時刻より遅れて到着。3次会場の塔の屋上に受験生全員が集  
合した。

第3次試験は、生きて下まで降りること。制限時間は72時間。

1人が壁を降りて行って、鳥のえさになりました。

ヒソカとギーちゃんは先に行っちゃった。一緒に行くかい？つて  
誘われたけど断ったの。だって、後が怖いし。どの扉にしようかな。  
・あつ、クーちゃんが呼んでる扉にしようつと。

扉を通って落ちたら、ジェットコースターみたいな滑り台でした。  
「きゃーっ、クーちゃん楽しいねー」。にやんにやー（目がまわ  
るー）」

アベシツツ！！

勢いよく到着！鼻うつた・・・地味に痛いです。クーちゃんは軽  
やかに着地してるじゃん、ちよつと悔しいー。

場所の確認をしたら、変な人が3人いました。何だろう？

『いらつしゃい、受験生さん。君が選んだ道は、闘いの道だ。ルー  
ルは簡単、これから進む部屋にいる対戦相手を降参もしくは殺せば  
君の勝ち。君が負けを認めた場合、10時間のペナルティーがつき  
別室で過ごしてもらつ』

「殺しても良いの？」

『殺しても良いが、相手も君を殺すつもりでくるからね。彼らは犯  
罪を犯した死刑囚、君に勝つと彼らは希望する物を手に入れる事が  
出来るルールもある。頑張る事だ』

殺しても良いなんて、嬉しいな。だって殺さずにつて難しいんだ

もん。

「さあ、初めの相手はオレだぜ。子どもだろうと手加減はしないからな」

「ヒヤッハーハー！子ども子ども子どもだー！ー！ー」

「君の血はキレイだろうね」

死刑囚たちはプラチナに向かって話しかけ、怯える姿を期待していた。自分こそ子どもをいたぶって遊ぶのだと考えていたが、子どもから溢れてくる冷気に気が付いた。表現しがたい恐怖が足元から這い上がってくるのを感じた。そんな時、子どもの笑い声が聞こえてきた。

「ねえ、コレ読める人っていないの？」

「にゃーにゃん（皆殺しにするからね）」

「さつきから、クーちゃんにお願いして出してもらってるのに。残念、次に期待しようかな」

「がっかり。3人もいたら誰か1人は、念が使えるかなって思ったのに……」

それに、自分が凍ってる事にも気付かないなんて、信じられない弱さだね。

「気付いてない？動いてみたら分かるよ」

「はあ！？何を粹がってるつつつつ、うぎゃああー！ー！ー！！！！」

「お、俺の足がああああー！ー！ー」

「血が流れないだとおおおー！ー！ー」

気付かないうちに凍らされていた死刑囚たちは、砕け散っていく自分の身体を見て叫び声をあげた。

「助けてくれ！俺は降参だ！！」

「じゃあ、ご褒美をあげるね」

につこりと笑いながら、頭部に晶石を撃った。砕けていく人ってキレイだよな。

「次の部屋に行こう、クーちゃん」  
「にゃん（つぎー）」

次々と容赦なく囚人を皆殺しにするプラチナ。

カメラで様子を見ていた試験官は、プラチナの念能力と猫が念字を出来ている事に驚いた。今年の新人の質の良さに感心しつつ、用注意が必要だと感じた。カメラには、プラチナが一階に到着したのが映っていた。

『47番 プラチナ 3次試験通過 第2号！！ 所要時間、7時間3分』

一階に着いたら2番目でした。初めだけ滑り台だったけど、後は延々と歩きでちよつと疲れたかも。

「やあ？思ってたより遅かったじゃないか？」

「ずーっと歩きだったもん。子どもの歩幅じゃ仕方ないでしょうが」  
「にゃんちゅ（おやつたべよー）」

「ボクも食べたいな？イルミにあげてただろう？」

「4枚だけね」

ウサギさんリュックからクッキーとゆで卵も出して食べてると、ギーちゃんが到着しました。ギーちゃんも仲間に入れて、どんな道を通って来たのか話したり、3人でランプをしたりしたけど時間がまだまだ残ってます。鬼ごっこしようって誘ったけど断られちゃいました。

「プラチナはクルタ族だね？」

「・・・ 何で知ってるの」

「それは簡単？君が来た時期を聞いたことと、今の反応で確信したかな？」

確かに旅団の誰かに聞いたなら、私が来た時期くらいは答えるかもね。でも、それを知ったからってヒソカに何かあるわけでもないの

に、何が言いたいの？ 旅団にとって良くなければ殺すべきかな。

「殺気を出さなくても良いよ？生き残りがいるのを教えてあげよう  
と思ったただだよ？」

「クラピカでしょ。知ってるわよ」

「旅団に復讐<sup>クモ</sup>を考えてる事も？」

「・・・それが何？」

「それただだよ？」

絶対面白がつてる。私に教えて、クラピカと戦わせようとしてる  
？ それとも、他に目的がある？ ヒソカが何を楽しみにしてるの  
か、原作知識が霞んで分からないのが気になる。旅団に何かあつて  
も、皆強いから大丈夫だと思っし、神様からもらった念能力で必ず返  
り討ちにしてやる。

試験終了まで、後12時間。次の試験に備えて寝ることにしまし  
た。

寝始めたプラチナを見つめるヒソカが、いつもにも増して気持ち  
悪かったと、寝起きにギタラクルから聞かされました。

変態め！！ いつか本当に駆除してやる！！

## 第13話 ハンター3次試験だよ（後書き）

第4次試験はサラッと流す予定です。

## 第14話 ハンター第四次試験だよ（前書き）

ハンゾーも意外とスキです。

あのツルッパゲなところが好きです。肉って書きたいな

## 第14話 ハンター第四次試験だよ

第四次試験内容は、狩る者と狩られる者でナンバープレートを奪い合うこと。

くじ引きで引いたナンバーが、ターゲット獲物でナンバープレートを奪えれば3点。ターゲット獲物でないナンバープレートは1点。自分のナンバープレートは3点。合計6点集める事が出来れば、四次試験合格。

場所はゼビル島、滞在期間は1週間。第三次試験の通過時間が早い人から出発となる。

今はゼビル島に移動中です。

47番プラチナのターゲットは、198番でした。3人兄弟のうちの誰かだね。ヒソカのターゲットは384番で、ギーちゃんは371番だつて。誰かわかんないや。

ゼビル島に到着。

トリックタワーの通過時間が早い人から出発していく。1番のヒソカが出發した2分後、2番のプラチナが出發した。

3兄弟の後を何となく付いて行きながら、クーちゃんとチョコを食べてます。昨日から3兄弟のうち1人がキルアの事を狙ってるみたいだけど、全然仕掛けないんだよ。ビビリちゃん、頑張ったらいのに。

応援してたらキルアに声かけられて、ビビリちゃんがビックリしてます。

どうするのを見てたら、2人が戻ってきて3兄弟が集合。どうやら陣形を組むみたい。でも、あつという間に負けちゃった。

キルアのターゲットは199番だつてさ。残りは投げられちゃった。私が欲しいのは198番。最初に投げられたのをキャッチしたから197番・・・仕方ない、反対側に投げられたの探しに行こうっ



と。

あと5日あるので、のんびり歩いてたら忍者がやって来ました。

「こんにちは、忍者さん」

「にゃーご(つるつるぴかぴか)」

「・・・お嬢さんこんにちは。でもその猫、絶対俺の悪口言った気がするぞー!」

どうやら勘が良い忍者さんのようです。

「忍者さん何か用？私がターゲットなのかな？」

「違う、俺のターゲットは197番だ」

「!!197番持つてるよー。他にもプレートあるなら交換してもいいけど、番号によるかな？」

「俺が持つてるのは、89番と198番だ。」

「んじゃ、198番ちようだい」

「わかった、交換しよう」

忍者が198番持つて良かった、これで6点集まったね。

今日は、日当たりのいい所を見つけてお昼寝して、クッキー食べてのんびりしようかな・・・

ピ。ピ。ピ・・・ピ。ピ。ピ・・・ピ。ピ。ピ

「もしもし？プラチナとクーちゃんです」

「やあ、久しぶり？プレート見つかったかい？」

「見つかったよー、ヒソカは？」

「ボクも見つけたよ？青い果実が育ってきたしね？」

「・・・それで、何かよう？」

「大きな猪がいてね、一緒に食べないかい？」

「食べるー!」

「じゃあ、待つてるよ？」

メールの地図を見ながら到着！猪鍋の良い匂いがたまりません〜

残りの数日は、結局ヒソカと一緒に過ごしました。お鍋のお礼に？エリクサー？をあげたら喜んでくれたけど・・・川でクーちゃんと水遊びをしてたら、横で裸になって身体を洗うのやめてほしいです。

「プラチナのエッチ？」

ヒソカがエロい間違いでしょ！？

放送が流れたので、出発地に戻る途中でギーちゃんに会いました。今まで何してたのか話して、ヒソカにエッチって言われた事について話しました。そしたら、

「ボクのも見る？」

だってさ・・・何でそんな答えになるの！？

私見たいって言った！？言ってないよね！？

やっぱり二人は類友だーーーー！！

とりあえず、無事に四次試験合格できました。

## 第14話 ハンター第四次試験だよ（後書き）

読んでくれて、ありがとうございます。

次は、最終試験です。

戦闘シーンがある予定で、頑張って表現したいと思います。

## 第15話 最終試験だよ（前書き）

クラピカが好きな人ゴメンナサイ。  
戦闘シーンって難しいです・・・

## 第15話 最終試験だよ

皆で気球に乗って移動中です。

クーちゃんとお風呂に入って、ポカポカしていると放送が流れました。どうやら、1人ずつ会長と面談するみたいです。

『受験番号47番。47番の方は、2階の第1応接室までお越し下さい』

応接室に入ると、会長が1人で座っていました。

「そんなに緊張せんと、座ったらどうじゃ」

「・・・なあに」

「2、3質問するだけじゃ。まず、なぜハンターになりたいのかな？」

「ハンターになれって言われたから。便利だし？」

だってクロロが、絶対取って来いって言うんだもん。自分でなりたいじゃないし。

「そうか。では、自分以外で一番注目している受験生は？」

「99番かな。404番も気になるけど・・・」

キルアは気になるね。だってイルミの弟だよ！？もうちょつと話してみないとわかんないけど、ゾルディック家の子だから遊んだら楽しいそうだね。クラピカは、旅団に復讐クモしたいらしいから気になる。もし、戦いを挑んできたら皆と遊んであげようかな。

「最後の質問じゃ、一番戦いたくないのは？」

「405番！」

テンション高すぎて、ウザいもん。つい殺したくなる。

「ふむ、わかった。さがってよいぞ」

「にゃー（ちょんまげザムライ？）」

「・・・似合ってるね」

「ふお！？ そうじゃろ」

47番、プラチナという名じゃったな。変わった子じゃ、子どもなのに血の匂いが濃かったのお。それにあの猫が気になるの。動物が念字を使っているのを久しぶりに見たわい。

本当に今年の新人は質が良すぎるわい。

4次試験終了から、3日たちました。委員会が経営するホテルで休憩中です。

『受験生の皆さん、1階の奥、大広間の方へお集まりください』

大広間に受験生が集合すると、会長がボードの前に立って説明を始めました。

どうやら会長が決めたトーナメント戦で、1勝すれば合格となるらしい。ルールは簡単、相手を殺さず「まいった」と言わせ者の勝ち。反則なし、武器は使用可。

プラチナの対戦相手は、404番クラピカでした。負けた方がヒソカと対戦だつて。やる気が無いのに、合格するチャンスが多いつてどついう事？しかも、気になる相手と戦えつて、めっちゃ嫌がらせやんか！

「最終試験を始めます！ 第一試合、ハンゾー対ゴン！ それでは、始め！！」

いつの間にか始まってました・・・それにしても、ゴンってしぶといなあ。良かった、ゴンの相手じゃなくて。イラっとして殺しちゃいそうやし、もし殺しそうになったらヒソカに怒られるしね。

結局、ゴンの粘り勝ちになりました。係員の人に抱えられて、退場して行きました。

「第2試合、クラピカ対プラチナ！ 始め！！」

どうやって戦おうか考えてたら、クラピカが話しかけてきました。どうやって、手加減しようか悩んでたけど誰が手加減してやるもんか！ って感じになったけどね・・・

「プラチナ、君には悪いが手加減するわけにはいかない。まいったと言っではくれないだろうか？ 君みたいな女の子に、手をあげるのは気が引けるのだが・・・」

「・・・・・・・・」

「戦うというのならば、本気でくる事だ！」

クラピカってこんな人でしたっけ！？ キャラ変わってるよね！

？ お前の方が弱いくせに・・・

「プラチナ、殺しちゃだめだよ？」

「分かってる、クーちゃんお願いね」

「いいよ？」

ヒソカにクーちゃんの事を頼みました。

「手加減しないのは、私の方なんだから！！」

「いくぞ！！」

2人は同時に、相手に向かって突っ込む。クラピカは二刀流の木刀で、プラチナは素手で激突。初めに仕掛けたのは、クラピカだった。左右から叩き込みつつ、プラチナの死角から脇腹めがけて蹴りをいれた。プラチナは自ら後ろに飛び、勢いを殺し着地と同時にクラピカの背後へ瞬動。クラピカが気付いた時には、背中に拳を打ちこみ仕上げて脚で蹴りあげ、回し蹴りを6連続で打ち込む。

倒れたクラピカに、レオリオ・キルアが声をかける。

「外野、嫌いよ！」

フードを下ろしながら、クラピカを見つめました。クルタ族ならばすぐにわかるはず。

「プラチナ、君は!!」

「やっぱり分かるんだ」

「・・・あの時、泉に行ったら君はいなかった。ギルディアさんの死体だけだった、君が生きていて良かった。きっとギルディアさんも喜ぶだろう」

もしかしくなくても、父親の名前を初めて知ったよ。ギルディアって名前だったんだ・・・

「君もギルディアさんの？緋の眼？を取り戻すために、ハンターを目指しているんだね。私も皆の？緋の眼？を取り戻すために・・・  
・ベラベラベラ」

自分の世界に入って話してるよ。私は？緋の眼？とかどうでもいいんですけど。生まれてすぐに、色が違うからって泉に沈めた奴らだよ？なんでそんな奴らの？緋の眼？を取り戻さないといけないのさ。

「クラピカ、私は？緋の眼？を取り戻したりしないよ」

「なぜ!？」

「自分を殺そうとした奴らなんて、どうでもいいもんでしょ？」

「!？・・・そうか、残念だ」

一人で落ち込んでるところに近づき、足を払って背中の上に立つ。蛙が潰れた様な声がしたけど、ジャンプしてさらに踏みつける。

ぐああああー!!

「まだ言わないなら、背骨折るからね」

「・・・まいった」

「勝者、プラチナ!」

クラピカは、レオリオに支えられながら壁に移動して、少し休憩



するみたいです。

ちよつとやりすぎたかな？クラピカの次の対戦者ってヒソカで大変だと思うから、こつそり？エリクサー？出して様子見に行こうかな。クーちゃんをヒソカから受け取って、頭に乗っけながら近づいて行ったら、レオリオがめっちゃ睨んできます・・・ そりゃ睨むよね。

「大丈夫？」

「大丈夫ってお前な！ 限度ってもんがあるだろうがよ」

「やっぱり？ でもクラピカって、あれぐらいいしなひと言ってくれないでしょ？」

「・・・たしかに」

「一応、やりすぎたと思うから。コレあげる」

レオリオに？エリクサー？を手渡す。

「私が調合した薬だよ。クラピカはクルタ族だから、特別に良いのあげる」

「・・・ありがとう」

「どういたしまして？」

クラピカって優しいね。普通、ボコボコにした相手に謝れる？ちよつと見直したね。

2人から離れて様子を見ると、レオリオがクラピカに？エリクサー？を飲ませて、回復速度に驚いてるね。あれだけ回復したら大丈夫かな。

結果は、ヒソカがわざと負けて、クラピカが勝ちました。

ヒソカなにか考えてるね。きつと悪だくみなんだらうね・・・

後は、ギーちゃんがキルアの前で変装を解いて、お家に帰るよう説得しました。説得成功したのかな？キルアは、ボドロを殺して失格になって帰って行っちゃいました。

他の皆は全員合格、ハンターになれたので講習を受けてます。途中で、ゴンが戻ってきてイルミと騒いでたけど、イルミが家の場所を教えたらやっと静かになりました。やっぱりゴンって苦手……

講習が終わったら、ハンゾーが話しかけて来て名刺をくれました。携帯の番号・アドレスの交換をしたよ。日本に行ったら観光案内してくれるんだってさ。他にも、レオリオとクラピカが声を掛けてくれたの。お互い頑張ろうね、また会おうねって話して、番号・アドレスを交換してわかったです。

ヒソカとイルミを発見、一緒に帰ろうって誘ったら用事があるからダメなんだって……。仕方がないから、イルミが骨折してたから？エリクサー？をあげて、2人とは飛行船乗り場でわかったです。飛行船に乗ろうとしたら、ゴン達と一緒にキルアを迎えに行かないかって誘われたけど、早くお家に帰りたいからって断りました。めんどくさいじゃん。

クーちゃんと飛行船に乗って、ホームに帰りました。クロロに電話したら、パクノダとマチがご馳走つくって待ってるぞっだって。合格祝いにパくっとしてくれるらしいし、皆と会えるのが楽しみだなあ。

## 第15話 最終試験だよ（後書き）

無事に？ ハンター試験を終わる事が出来ました。  
次は、クーちゃんをどうにかしたいと思います。  
猫の寿命って、7年ぐらいでしたよね？

## 第16話 えいんふえりあ（前書き）

猫の寿命を教えてください、ありがとうございます。  
意外と長寿でビックリです・・・

今回のH×Hでは、短めをお願いしたいと思います〜  
適当な私でゴメンナサイです。

## 第16話 えいんふえりあ

ハンター試験が終わって、夏になりました。

今は日本にいます。クロロが本を買いに行くといっているので、付いて行きました。

東京から始まって、名古屋に大阪、現在は京都にいます。本屋さん巡りもしながら、ケーキ屋さん巡りをして、観光もしています。日本のケーキっておいしいんだけど・・・クーちゃんお断りって言われるとが多くて困ってます。お持ち帰りにしてもらって、ホテルで食べてるんだけど、お店で食べたほうが雰囲気があっていいんだよね。今まで食べたケーキで私は、イチゴのタルトが一番おいしかったかな。クロロは、チーズケーキとガトーショコラなら食べるんだよ。クーちゃんは、ミルフィーユが大好きみたいです。口の周りをクリームだらけにして食べる姿がカワイイんだよ

クロロを待ってます。古本屋さんに入って1時間。クーちゃんは入っちゃ駄目だから、外でしりとりしながら待ってるんだけど・・・遅い!!

「クーちゃん、クロロ遅すぎだよね!？」

「にゃ・・・(しんどい・・・)」

「クーちゃん大丈夫？」

「・・・バタリッ」

「クーちゃん!? クロロ、クロロー!!」

急いでクロロを呼んで、とりあえずホテルに戻って? エリクサー? を使った様子を見ることになりました。本当ならすぐに元気になってもおかしくないのに、クーちゃんはずっと寝たままです。

「プラチナ、野良猫は長くて5年、飼猫は10年が寿命だ。クーは野良猫からお前の猫になって、念字を使えるようになった。」

「・・・うん、クーちゃんは普通の猫じゃないよ?」

「念が使えても、猫は猫だ。寿命がきても、おかしくはないだろう」

クーちゃんが倒れて2日目、念字がうまく出せなくなって? エリクサー? も効果が無くなってしまう。3日目には、水も飲まなくなつて・・・ 4日目の朝、心の音が聞こえなくなりました。

クーちゃんを抱えて、泣いて泣いて泣きました。ずっと、ずっと一緒だと思つたのに・・・

「クロロ・・・クーちゃん、楽しかったと思う?」

「・・・ホームに連れて帰ろう。寂しくないようにしてやろう」

クーちゃんをカゴにそつと入れて、ホームに帰りました。

ホームには、パクノダとマチ、シャルナークが待つてくれました。  
した。

クーちゃんをカゴから出して、お気に入りのクッションの上に寝かせました。お花をたくさん添えて、ローソクに火をつけて、まわりを飾りつけたからちよつとは寂しくないかな・・・ 涙が止まらなくて、ポロポロ泣いてたらマチが抱っこしてくれました。

・・・カサカサ・・・カサカサ・・・

突然、添えていた花が揺れて、ローソクの火が大きくなった。

クロロが読んでいた本を閉じ、クーが寝かされているクッションに近づく。クッションに寝かされているクーを見つめ、微笑みをうかべた。

クロロの動きを見守っていたパクノダ達は、何かあるのかとクーを見るがわからない。

「プラチナ、クーをよく見て見ろ」

クロロが笑ってる・・・ クーちゃんに何かあるんだ。普通に見てもわからないから？<sup>ギョウ</sup>凝？をしてよく見ると、クーちゃんが寝てる横にクーちゃんがいた。

（にゃ～にゃんにゃ～） プラチナ、だいすきだよ）

「クーは魂だけになっても、お前の事が好きなんだな」

クロロの言葉を聞いていると頬を流れる涙が止まらないけど、クーちゃんに向かって笑いかけたらクーちゃんも笑ってくれた。

クーちゃんの魂・・・魂がいる・・・魂があるなら！！！！  
プラチナはマチの腕の中から出て、クーに近づいた。クーの魂を見ながら『ヴァルキリー』を出し、レナス（23歳・アース神族）に設定を変更。

クロロ達が見守るなか、1人と1匹はお互いに歩み寄っていく。

「クーちゃん、これからもずっと一緒にいてくれる？」

（にゃんにゃ～） ずっといつしよにいたいよ～）

プラチナの背中に銀色に輝く翼が現れ、羽ばたきながら浮かび上がる。銀翼から輝く羽がまわりに降りそそぎ、幻想的な景色をつくりだしていく。

クーが銀色の羽に包まれていき、クーの亡骸とともに光の粒となり、プラチナへと吸い込まれていった。光の粒がなくなるとプラチナの銀翼も消え、羽も輝きが薄れて見えなくなっていく。

『ヴァルキリー』が勝手に出てきて、キャラクター一覧が開かれる。そこには、今までなかったクーがいた。ステータスに異常は見られず、『《召喚しますか？》』と表示が出ていた。召喚しようとする、《合言葉をお願いします》だってさ・・・ 合言葉ってアレ

だよね。

《死の、先を逝く者たちよ！》

銀翼が再び出現し、銀翼が羽ばたくとともに光の粒が降りそそぎ、やがてクーの姿かたちとなった。

「にゃんにゃん（ひさしぶり〜）」

「クーちゃん！ これからもよろしくねー！ー！」

「……はあ、なんでもありだな……」

ヒシッと抱き合う2人を見て、嬉しいのやら呆れるのやらと感じるクロ口達でした。



## 第16話 えいんふえりあ（後書き）

読んでくれて、ありがとうございます〜

次回は、ヨークシンのオークションです。いろいろ考えてます・・・  
楽しみにお待ちくださいです。

第17話 9月1日 ? (前書き)

今回も、ヴァルキリーを知らないと分かりにくいかな・・・  
何となく感じとってもらえたらなあ～～～ と思います。

ごめんなさいねー

第17話 9月1日？

クーちゃんがエインフェリアになってから、何が変わったのか『ヴァルキリー』を開いて調べました。すると、クーちゃんがえらい事になってました。どうやら、他のキャラと同じようにレベルを上げれるし、スキルアップもできるし、キャラの中でブラムス・フレイの武器が装備できたし・・・剣とか弓・杖は装備出来ませんでした。猫の手だと持てないから？

とりあえず装備出来たの物で、技もできるのか試してみたら出来ました。すごいよ！？ 猫なのに、全キャラ最大攻撃力があるエーテルストライク撃ったら、クレーターつくれるんだもん。ブラムスの奥義ブラッディカリスなんて、ノブちゃん吹っ飛んでったし。

クーちゃんには、2人の技をみっちり特訓しました。レベルもスキルもMaxまで上げたので、無敵猫の完成。まあ、フレイとブラムスの技しか使えなかったんだけどね。

練習風景を見たクロロが、「化け猫か・・・」って言ったのでクーちゃんに光弾の雨を降らされて、逃げてたのは面白かったあゝだつて必死に謝りながら逃げてるんだもん！

以上、クーちゃんの変化でした。

もうすぐ大きな仕事があるので、クロロとヨークシンのアジトに移動したいと思います。

ヨークシンのアジトに到着！

私は旅団<sup>クモ</sup>に入っていないから、仕事に参加するのは自由だったんだ

けど、クロロから今回は参加してほしいって言われてるので頑張ります。もちろん、クーちゃんも参加するよ。

全員集まったみたいです。ヨークシンで何するのかな。

「今回の目的は、地下競売のお宝全部。邪魔するものは皆殺しにしたい、俺が許す」

「おおおおー、団長！俺は嬉しいぜー」

嬉しいのはわかるよ？ マフィア全部敵に回して遊べるからね・  
・でも、ウボォー煩すぎ！！

今回は奪取組に入りました。ノブちゃんと一緒にいるだつてさ。  
出発の前に、クロロ・パクノダの監督のもと準備をします。

「プラチナ、近距離はノブナガに任せたらいい。遠距離攻撃のタイプはないのか？」

「遠距離？ あるよ？」

「あるなら、今日はそれにしておけ」

「はい」

『ヴァルキリー』を出して、ラウリイ（18歳・弓闘士）で武器は？魔弓レイザー・フォーター？ 防具は？エターナリイ・ガープ？ アクセサリーは？ヒール・リング（自動回復）？？レジスト・チャーム（状態異常無効）？に設定を変更。

クーちゃんも武器は？透器エーテル・レイザー？ 防具は？エターナリイ・ガープ？？亡王の仮面？ アクセサリーは？クラック・リング（防御破壊）？？ヒール・リング（自動回復）？に設定を変更。

今回の約束は、こんな感じです。

？ノブナガから離れないこと

？皆の回復係をすること

？おやつを食べすぎに注意

ちゃんと守りたいと思います。

クロロとパクノダは留守番。

ノブナガとウボオーとクーちゃんと一緒に、いざ出発！！

オークション会場のホテルまで後ちよつと。

「にゃーん、にゃん！！（いい匂いがするよー、くつきー！！）」

「確かに！ あのお店だ。くつきー買ってきますー！！」

「はあ！？・・・もう入ってるし」

おいしそうなクッキーがたくさんあります。イチゴ・チョコ・ナッツ・バナナ・リンゴ・プレーン・・・どれにしようかなあゝゝ

「プラチナ、約束の？番忘れてないか？」

「5つだけにする」

「多すぎだろ！？」

「・・・・・・3つなら買ってやるぜ」

「ウボオー・・・お前甘やかすなよ」

「いいじゃねーか」

という事で、3つ（イチゴ・チョコ・ナッツ）買ってもらいました。さつそくイチゴクッキーを食べながら歩いてます。

ホテルに到着！ 丁度ホテルに入ろうとしていた、3人のヤクザと入れ替わって潜入成功 後は始まるのを待つばかりです。私達は、競売が始まったら入口で逃げて来た人を殺る係なんだけど、殲滅係がフェイタン達だから誰もこっちに来ない気がする・・・

あと1時間で始まりだね。

第17話 9月1日 ? (後書き)

次は、ウボォーラ致事件の予定です。

第18話 9月1日？

オークション開催。

参加者が全員、地下競売上に入り、エントランスホールは静かになった。

しばらくすると、地下の会場から銃声が響き渡る。2人だけ会場から出てきたが、シズクのデメちゃんに殴られ、階段まで行くことが出来なかったようだ。

階段を登りきったところで、待ちかまえる3人がいた。

おしかつたけど、入口まで逃げてこれる人はいませんでした。もうちよつと頑張つて欲しいよねえ！

3人と1匹で、お宝回収が終わる合図を待つてたらシャルナークが慌てて走って来ました。

「3人とも、お宝がなかったんだ。今から気球で移動するから、マチのそこへ行くよ」

「お宝がないだあー！？」

「おいおい、まじかよ・・・」

「にゃー（つまんないー）」

「ないの！？ ゲームしたかったのに！」

旅団は気球に乗り、移動中。気球を発見した護衛のマフィア達が、車で追いかけてきているのが見える。現状報告をウボォーが電話でクロロにしている。これからどうするのか、裏切り者がいたのではないのか、話し合っているようだ。



そのころプラチナは・・・ チョコクッキーを皆にお裾分けしながら食べてました。

イチゴも美味しかったけど、チョコもなかなか美味しいねえ」

「団長、戦ってもいいんだな？」

『ああ。お前たちが暴れれば、商品を移動した？陰獣？も出てくるだろう』

団長との話し合いが終わり、競売品を持ち去った？陰獣？を誘き寄せるために、マフィアの雑魚で遊ぶことが決まった。気球を岩山に着陸させ、マフィアが集まるのを待つことに。

私も行きたかったのに、ウボオーが1人で遊びに行っちゃいました。

手を出しちゃダメなんだってさ、ズルくない？

ぎゃー、うぎゃー

パンパン！パン！

ヒャッハー！！！！

岩山の下では、ウボオーギンとマフィアが戦っているのがよく見える。マフィアは頑張って銃やライフル、ロケットランチャーを撃って攻撃しているが、ウボオーギンは全くきいておらず笑っている。

「ゴリラ対アリだね」

「普通の銃じゃ無理だろ」

「筋肉バカだからね」

「にやにや、にや！ （プチっと踏み潰せ！）」

「プチっとう」

アリが弱すぎて、見ても面白くないね。

トランプで遊びながら？陰獣？が出てくるのを待つことに・・・  
マフィアが全滅がし、ようやく念能力者が5人近づいてくるのが  
わかった。

「出てきたね」

「本当だ？陰獣？強いかな？」

「にゃん（弱そう）」

「確かに」

パンツ一枚男が、地中から突然出てきてウボオーギンを殴りつけたが、ウボオーに殴り返され顔が潰れた。怯まずパンツ一枚男は、ウボオーギンを地中に引きずり込もう試みている。パンツ一枚男は頑張ったが、ウボオーギンの？超破壊拳？で吹き飛んだ。  
ビックバンインパクト

他の？陰獣？が襲いかかる。

？陰獣？に露出狂がいる。どこの組にも変態って生息してるんだね。

ウボオーってゲテモノ食いだっただ・・・デブの頭かじったよ！？それにしても、デブのヒル気持ち悪いね。毛玉も負けないくらい気持ち悪いけどね。なぜにジャージ！？

は！！！！

ウボオーの大声が爆発しました！

「お前、俺らの鼓膜も破るつもりかよ！！」

「言ってからにしろよな」

「にやにやー（疲れるー）」

？陰獣？との戦闘は終わったが、毒を盛られたウボォーギンは首から下が動かず、肩の傷口からはヒルが侵入しており、助けが必要な状態になっていた。

首から下が動かなくなったウボォーを見に行きます。

シズクがヒルの毒を吸いとうとし、シャルがヒルの退治方法を説明していると・・・！？

ジャララツツ      ビューーーンン！！！！

ウボォーギンの身体に突然鎖が絡みつき、ウボォーギンの身体を引っ張り連れ去ったが、マチの念糸がウボォーの足につき糸が伸びていく。

飛んでっちゃったよ！？    あのでかい体で飛んだよ！？    すごいなあって感心してたら、マチが念糸を飛ばしてくれたから、皆で追いかけるんだけど・・・    運転はシャルナークで助手席にはシズク、後ろにはマチ・ノブナガ・フェイタン。私は！？

フランクリンはウボォーのためにお酒を盗りに行っちゃいました。

「一緒に行く！！」

「・・・しよーがねえな、抱っこしてやるよ」

「にやにやー（ノブちゃん優しい）」

「ノブちゃん言うな！」

プラチナをノブナガが抱き、後ろの座席に4人が乗り、ウボォーを追いかける。

念系に気付かれたが、相手の車が見えているので問題なく追いつくと思われたその時、

？不思議で便利な大風呂敷！！！？

車のボンネットに男が飛び乗り、念能力を発動させた。

男の念能力で包まれた車は、あっという間に男の手に納まるサイズになり、布の内からはナブナガの声が聞こえていた。

旅団たちは瞬時に車から飛び降りたが、プラチナを抱っこしていたノブナガが、プラチナを車外に投げるので精一杯になり、自身は逃げ遅れてしまったのだ。

「ノブナガは乗っていた位置が悪かたね」

「プラチナを出したのは、褒めてもいいんじゃない？」

「布で包んだ物を小さくする、便利な能力だ。これなら商品もポケットに入る。奴が運び屋だね、元の大きさにも戻せるはず」

「にゃー（たすけるー）」

「あれ？　？陰獣？つて全部で10人だよね？」

「ウボォーを連れ去ったのは？陰獣？じゃないのか」

「こいつらに聞いたら分かるね」

「お前達が？幻影旅団？か・・・ここで死んでもらうぞ」

「せいぜい悪足掻きをするんだな」

フェイタンが乗り気で？陰獣？と遊び始めたが、すぐに勝負はついた。ノブナガは無事に出てこれたので、布の念能力の男はフェイタンがアジトに連れて行くことに。ウボォー奪還にはフィックスが加わった。

「馬子にも衣装だな」

「あ？　ぐあぁっ！！」

ウボォーを縛っていた枷を外し、シズクが毒を吸い取る。ヒルを退治するにはビールを飲むしかないが、体力回復にプラチナの？ノール・エリクサー？を飲ませた。

旅団は競売商品を手に入れたので、引き上げることになったのだが、ウボォーギンは鎖野郎を殺しに行くと言い張った。

話を聞いていたプラチナは、ウボォー見ていて嫌な予感があるのはどうしてか考えるが、思い出せそうで、思い出せない。大切なことを忘れてる気がする・・・　何があっても対応できるように、クーちゃんを連れて行ってもらえるよう話してみよう。

「オレは鎖野郎とケリを付けるまで、戻らねえからな！！」

「仕方が無いな・・・　ちよつと調べてあげるよ」

「・・・・・・」

「どうした、プラチナ。心配すんじゃないよ、またクッキー買ってやるからよ」

「でも嫌な予感がある。クーちゃん連れて行つて！」

「にゃーにゃん　（ついてくよー）」

「しゃーねえな、おとなしくしてろよ」

「じゃ、行くよ」

「おう！！　にゃん（おう）」

シャルとウボォー、クーちゃんを見送り、他のメンバーはアジトに戻っていった。

もしも、ウボォーに何かあればクーちゃんが知らせしてくれるので、

プラチナもクロロのもとへ安心して戻って行った。

第18話 9月1日 ? (後書き)

いつも読んでくださり、ありがとうございます。

第19話 9月2日（前書き）

短いです・・・



第19話 9月2日

プラチナ達はアジトに戻って行き、クーはウボオーの肩に乗って、シャルナークと移動中。

何処かのホテルの部屋に入り、ウボオーギンがあつという間に中の人を殺しました。

シャルナークは、ウボオーを捕えていたファミリーがノストラードであると気付いた。ノストラードが使用しているホテル一覧をウボオーに渡しながら、ウボオーに声をかける。

「気をつけるんだよ、ウボオー」

「ありがとよ！　いくぞクー、しっかり掴まっとけ」

「にゃー（りょうかい）」

ビールを飲みながら、鎖使いを探します。

近場のホテルから襲って行き、情報を探っているとノストラードの娘の話が聞けた。

「娘の占いがよく当たるんだ！　十老頭にもファンがいて、すごいらしい！　お願いだ何でも話す殺さないでくれーっぐええ」

「にゃんにゃう（うらないだって）」

「ああ、予知みたいなものだろ。団長の言った通り裏切り者はいなかった」

「にゃー（あつたりまえ）」

「そうだな、次行くぜ！！」

ビルからビルへ飛び移る、ウボオーギン。

「にゃにゃっ　にゃっ　にゃにゃーにゃっ　にゃ　」

「・・・なんの歌だ？　そりゃー」

「にゃーんにゃ　（なーいしよ　）」

「??」

だってウボオーって、マ○オみたいにジャンプするんだもん  
プラチナとしたゲームに出てきた、ちょびヒゲのおじちゃんにち  
よつと似てる気がするし」

日も暮れて夜になり、やっと鎖使いを見つけた。

鎖使いはホテルの部屋で、待ちかまえていたが、現れた旅団クモの肩  
に乗っかている黒猫を見て驚いた。その黒猫が、ハンター試験を共  
に受けた少女が連れていた猫に、あまりに似ていたから。

鎖使いがものすごい見てくるんだけど・・・ どうか会ったの  
かな??

クーは興味のないものはすぐ忘れてしまうので、クラピカには気  
付かなかったようだ。

ウボオーギンは気にせず、鎖使いに話しかける。

「何処で死にたい？ 場所くらい選ばせてやる」

「・・・ 荒野がいい、周囲に迷惑がからないようにな」

「行くぞ」

荒野に到着。

ウボオーギンは鎖使いから離れ、岩山の上にクーを下ろした。

「クー、今からオレは鎖使いと戦う。何があっても近づくんじゃね  
えぞ？ オレに何かあったら一人でアジトに戻れ、鎖使いに手を出  
すなよ？ わかったな」

「にゃーんにゃあ （わかった、まもるよ）」

鎖使いとウボオーの闘いが、ついに始まる。クーは邪魔にならな  
いよう？<sup>ゼッ</sup>絶？をする。

ここからは、クーちゃんがリポートしたいと思います。

きんぱつさんが、ベラベラしゃべってます。ウボオーはあんまり  
きいてません。

おっと、ここでウボオーがつっこんだ！！ きんぱつは、よけ  
たー

ドッカーンとして、バカーンってなって、ボキボキしてます。  
なんかいわれて、ウボオーがぜんりよくをだしました。  
かったー！！！！

と思つたら・・・ ウボオーが鎖に絡まって、倒されちゃった。  
ウボオーが死んじゃった。

鎖使いがウボオーを地面に埋めているのを確認し、クーはアジト  
に素早く戻って行く。

クラピカが猫の存在を思い出し、周囲を探すが見つけることは出  
来ず、諦めて戻って行った。

黒猫を見逃してしまった事で、女神が本格的に動き始める。

第19話 9月2日（後書き）

文章力が欲しい今日この頃・・・  
いつも読んでくれてありがとうございます!!

第20話 9月3日 ? (前書き)

20話目になりました。

これからも、原作を大切にしていきたいと思います！

第20話 9月3日？

戻った旅団のアジトでは、クロロが静かに読書をし、フェイタンが拷問をして楽しんでた。ノブナガは、ウボォーとシャルナークの事を伝え、プラチナはクーをウボォーに連れて行かせた事を伝える。

3時間ほどし、シャルナークが戻ってきた。

さらに時間が過ぎるが、ウボォーはまだ戻って来ない。

クロロが鎖使いに付いて考えを話し、夜明けまで待ち、戻ってこなかった場合予定を変更することになった。しばらくして、もうすぐ夜明けという時に誰かがアジトに入ってきたことをコルトピが感じる。

旅団が気を張った瞬間、プラチナが立ち上がり皆に話しかける。

「大丈夫、この感じはクーちゃんだと思うよ・・・」

すると、クーが慌てたように走って入ってきてプラチナに飛びついた。にゃーにゃーと必死に声を出し話しかけている。念字が出ていないので、何を話しているのかはプラチナにしか分からず、皆は様子を見るしかない。話が終わったようだ。

プラチナがクーを抱いたまま『ヴァルキリー』を出し、レナス（24歳・アース神族）に設定を変更すると、クロロに近づいて行く。

「ウボォー死んじゃったんだって」

「・・・鎖使いにだな、能力は分かるか？」

「クーちゃんの話だと、鎖が急に現れたり、鎖に捕まると念が出せなくなったり、鎖使いの怪我がすぐに完治してたみたい」

「鎖が急に現れたというのは具現化系か？ 念を出せなくさせる能力、治癒力強化・・・クー、他に気になった事はないか？」

「にゃーんに、にゃんにゃう（くもへの、ふくしゅうだったみたい）」

「そうか・・・」

「にゃんにー（さいごわらってたよー）」

「ふっ、ウボオーらしい」

クーちゃんの話聞いて、皆ちよっぴり笑ってる。ウボオーって、戦闘バカだったから目にうがぶよね・・・それじゃ、私が出ること、やりに行かなくちゃね。

「クロロ、ウボオー迎えに行ってくる。ウボオーなら来ると思うんだ」

「わかった、上手くいけば電話をしろ。さあ、俺らも動こうか・・・」

「んじゃ、またね」

クロロと話し終えて、ウボオーを迎えに行こうとしたらノブナガが話しかけてきた。

「プラチナ、あいつのこと頼むわ」

「まかしといて」

ノブナガに微笑み、ウボオーを迎えに行くために屋上に向かう。

方角をクーちゃんに聞いて、その方角に向かって精神を集中する。

・

『ちくしょー、もう一回戦えれば勝てるのによー。くっそー 鎖  
野郎!! ぶっ殺してやる!!』

やっぱり・・・まだ、自分の遺体の近くにいたい。間に合うね。クーちゃんを腕に抱いてから銀翼を出し、空高く飛びあがり、ウボォーの声が聞こえる場所へ急いで向かう。

プラチナが飛んでいく軌跡には、銀色に輝き、まるで流れ星が流れた様になっていた。

ウボォーは遺体のそばで、戦いのシュミレーションをしていた。

『うおりゃ! せいや!! はああー!!!!!!』

遺体の横に降り立ち、クーを地面に下ろす。1人と1匹は戦う姿を見ていたが、いつまでも気付かないので声をかけることにする。

「ウボォー、クーちゃんとお迎えに来ましたよ〜」

「にやうにや〜（おむかえですよ〜）」

『んん!?! プラチナとクーの声が聞こえるな・・・』

見当違いの方向を向いて、考えるウボォーギン。溜息をついたプラチナは、ちっちゃな晶石を投げて気付かせた。クーは、ウボォーギンの足に手をつき、爪を立てた。

ゴン!!      メリッ!!

『いつてー!!!!!!』

「お久しぶり〜 元気?」



「にやう〜（ウボォー）」

『お前らな！ オレは死んでも元気だぜ！ そうじゃなくて、何で話でkindだよ！！？』

「そういう能力なの。ウボォーは、まだ生きたい？」

『もちろん！ 生きれるんなら、まだまだ暴れたいね！！』

「それじゃーね・・・カクカクシカジカ」

ウボォーギンに、私の能力に付いて話す。クーちゃんが本当はもう死んでいて私の能力で生きていることや、ウボォーも望めば一緒に生きる事が出来ること、もし一緒に生きる場合、念能力はそのままでもう一度死んだ場合はエインフェリアなので、私が死なない限り生き返られる事を伝える。

「どうする？ 私と一緒に生きる？」

『おう！ プラチナにクー、これから頼むぜ！！』

「にや〜（いっしょだよ〜）」

「それじゃ、じつとしててね」

クーちゃんの時のように、銀翼から輝く羽がウボォーギンと遺体を包み込み、光の粒となってプラチナへと吸い込まれていった。光の粒が全て吸い込まれると『ヴァルキリー』がプラチナの手の上に出てきた。キララ一覧には、ウボォーギンが新しく加わっていた。

「よかった、ちゃんというね」

「にやー（よかったねー）」

「上手くいったから、クロロに電話しないとね」

プラチナは電話を取り出し、クロロに成功した事を伝える。すると、クロロから指示が出た。オークション会場のホテルまで、派手にマフィアを殺しながら行くこと。ウボォーはまだ出さないこと。

容姿は、初めにオークション会場を襲撃した時の容姿で来ること。どうやらマフィアによって顔写真を公表され、懸賞金をかけられているらしい。

指示を実行するために『ヴァルキリー』でレナスからラウリイに設定を変更し、クーちゃんと一緒に移動をはじめめる。

町に入ってからクロロの言った通り、マフィアに顔がばれているようで狙われはじめた。マフィアらしい人を片っ端から殺していく。弓で顔・胸・足・手を同時に狙い撃つ。ビルからビルへ飛び移りながら、殺していく。遠距離からの攻撃は、弾け飛ぶ瞬間がいまいちよく見えないのが残念だね。

オークション会場のホテルに到着。

ホテルに侵入し、クロロを探しはじめると上の方の階で気配を感じた。クロロがいるはずの広間に入っていくと、クロロが窓を開けて指揮者のように指揮を振っていた。楽器はマフィアの悲鳴？

？絶？をやめて、クロロに話しかける。

「誰への演奏曲かな？」

「ふふふ、ウボォーさんにだよ。彼は喜んでくれるだろうか」

「照れてるんじゃない？ そんな気がする」

「にゃ」（てれてる）

「そうかもな…………… お客さんが来たようだ」

ギイ…………… パタン

お髭が素敵なおじいちゃんと、銀色の長髪が似合ってるおじさんが登場。殺る気満々だね……………

さあ、2対2＋1匹でどう戦うのかな？

第20話 9月3日 ? (後書き)

ゼノ・シルバとの戦闘シーン・・・書けるかな？  
頑張りますが、あまり期待しないで~~~~

これからもよろしくです。

第21話 9月3日 ?

殺気で部屋が満ちている。

「プラチナ、気をつけるよ」

クロロが声をかけてくれるたけど、本当にヤバイ感じだね。

4人で睨み合っていると、シルバがゼノに話しかけた。

「親父、気をつける。あの男は他人の能力を奪う」

「・・・」

先手必勝！！ プラチナは考えていた。

遠距離タイプは今、接近戦は不利。勝負をするならば、離れていくしかない。

（クーちゃん、サポートよろしく）

（まかせて）

プラチナはクーと念話で打ち合わせをし、2人の隙をつかがう。まるつきり隙が無い。二人同時に狙い撃つのが無理ならば、隙をつくって大きい方を狙うのが一番。クロロに目配せをし、お互いのターゲットの確認をする。

（クーちゃん、2人が離れるように間に攻撃してちょうだい）

（りょーかい）

クーちゃんが、クロロと私の前に出てくる。

敵の2人は、前に出てきた黒猫を不思議そうに観察していると、黒猫は飛びあがり念での攻撃を始めた。

「にゃー（浄化してあげるわ、神技！ エーテルストライク！）」  
「なに！？」

ドゴオオオオーン！！！！

クーの攻撃により、二手に分かれて戦う事になった。

ゼノはちゃんとクロロのところにいったね。さあ、シルバが接近してくる前に攻撃しないと殺られそう。目つきが怖いですってば。

「神の名のもとに、奥義！ レイヤーストーム！！」

プラチナの念で強化された約50本の矢が、シルバを追撃している。

今のうちに設定の変更をしなければ、プラチナに勝機はない。『ヴァルキリー』を出し、クーの設定を変更。接近戦を得意とするブラムス（不死者の王）にし、プラチナが設定を変更する時間を稼いでもらう。

シルバは雰囲気が突然変わった黒猫を警戒した。

黒猫からは、先ほどまで感じられなかったオーラが出ている。プラチナと呼ばれた者が本を出してから変化した。あの本に何か秘密があるな。

シルバがプラチナに近づこうとすると、黒猫が邪魔をしてきた。

「にゃんにゃうー（プラチナには近づいたらダメー）」  
「念字が出来るのか。変わった猫だ」

「にやうにや！（ボクは猫じゃなくてクーだもん！）」

「クーという名前があるのか・・・ふん、聞いたことがあるな」

「にやう？（クーのこと？）」

「そうだ」

不思議な猫に、プラチナという名前。イルミが言っていた不思議な念能力を使う少女と猫とは、この2人のことだったのだな。楽しみそうではないか。

シルバが笑ってる？ さっきよりも殺気が緩んでいる。クーちゃんと何を話したのか気になるけど、今がチャンス。出したままの『ヴァルキリー』でレナス（アース神族）に設定を変更し、ウボオーの召喚を行う。

「死の、先を逝く者たちよ！」

銀翼が出現し、翼から出た光の粒が人の形を形成し、ウボオーギンが召喚された。

前世のままの姿で現れたウボオーギンは、周囲の状況を確認すると喜びをあらわにした。

「プラチナ！ 暴れていいんだな！！」

「もちろん、全力でお願い」

「おおお！！」

「クーちゃん、下がっていいよっ」

クーが下がると、ウボオーとシルバの戦いが始った。お互いに一步も引かず、打撃を入れ合う。

プラチナはクーと共にさらに下がり、ウボオーにシルバをま任せ、



ゾルディック家専用無線機が鳴っている。これが鳴るのは暗殺完了の時のみ。

シルバが無線に出て話をしている。

「イルミか」

『うん。オレの依頼人は？』

「ここにいる」

『それじゃあ？十老頭は始末した、約束の口座に入金よろしく？つて伝えといて』

「わかった・・・お前が話してたプラチナがいるぞ」

『そうなんだ！　今から行くなって伝えといて』

「ああ」

シルバが話しているうちに、クロロとゼノが瓦礫の中から出てきていた。

お互いに命拾いしたな、と話している。どうやら、手加減をして戦っていたようだ。

「団長、大丈夫か」

「問題ない」

「ビックリするじゃねえーか！」

「にやゝ（心配したゝ）」

戦いは、クロロがターゲットではなくなったので終わったようだ。上から様子を見ていたプラチナは『ヴァルキリー』から？ノーブル・エリクサー？を出し、階下の皆を対象に使用した。

クロロ、ウボォーはもちろんのこと、シルバやゼノまで全回復していく。



階下に飛び降りたプラチナは、皆の状態を確認する。

「回復しましたか」

「すごい能力じゃの」

「プラチナ、イルミが会いに来るそうだ」

「イルミもヨークシンにいるんだ？」

偶然もあるんだと考えていたが、クロロが依頼していたことを説明し、ゼノの補足から何となく理解することが出来たプラチナ。クーとじゃれていると、イルミがやって着たようだ。

「やあ、プラチナ。元気にしてたかい？」

「お久しぶり、元気にしてたよ」

「にやゝ（げんき）」

イルミはプラチナに抱きつき、クーがイルミの頭に乗っかり和む。思う存分和んでいると、イルミが懷からフィナンシエを出してプラチナに渡した。

どうやら、ゴトーからのプレゼントらしい。袋には？いつでもお越しください？と書いてあり、ゼノとシルバも歓迎すると頷いていた。

また今度遊びに行く約束をし、ゾルディック家の皆さんとお別れをした。

ゴトーさんって優しいな。イルミも好きだし今度絶対に遊びに行こうと。

遊びに行くには、クロロを説得しないといけないので大変そうだ。

遊びに行くことを考えていたら、クロロが話しかけてきた。

「プラチナ、ウボオーで皆を驚かすのдар？　なおしておけよ」

「はい、ウボォー次は宴会の時に呼ぶからね」

「おおつ、団長・プラチナ・クーまた後でな!!」

「にゃうう（またあとで）」

ウボォーを返した後、クロロが旅団に指示を出し、フェイクの旅団全員の死体を用意させ、オークションを開催することになった。シャルナークが司会をし、パクノダが商品を運ぶお姉さんをし、コルトピが商品のコピーをする。他の旅団は、箱から順番に商品を出したり、包んだりと忙しく動いた。

プラチナもお手伝いをしていたが、クーが呼ぶので行ってみると？緋の眼？があった。

私もクルタ族、？緋の眼？は同族の人たちの遺品だが、私を殺そうとした一族に何の気持ちもわいてこない。一応、誰がいくらで落札していくのかは見ておこうかと思う。

クーちゃんと会場の様子を見ると、？緋の眼？は29億で落札された。しかも、あの姿はクラピカのような気がする。商品の受け渡しの際に確認すると、間違いなくクラピカだった。ハンター試験の時にクラピカが言っていた事を思いだした。同胞の眼を取り戻す・・・ 有言実行だね。

感心して見送っていると、クーが話しかけてきた。

「にゃうにゃ!（あいつ、ウボォーころしたやつだよ!）」

「・・・マジで?」

「うにゃ（マジで）」

「おかしいよ、だって半年前まで念知らなかった奴だよ!? とりあえず、クロロにだけは知らせないと・・・」

オークションが無事に終わり、アジトで宴会をしていると、クロ  
口がプラチナに声をかけてきた。

「プラチナ、サプライズをするんだろ？」

!

「にゃくにゃお（いまからサプライズショーだよ）」

『ヴァルキリー』でレナスに設定変更して、ウボォーを召喚すると部屋の空気が止まった。

ノブナガ、フェイタン、フィックスは酒が入ったコップを落とし、ヒソカが携帯を落とし、マチは口が開きっぱなしになった。

「よお！ みんな元気か！」

「はあ——ああ——!!??」

└

ウボォーが出てきた後は、混沌としていた。

あつちにこつちに、移動するウボォー。皆に酒を飲まされ、陽気になっていく。

なぜウボォーがいるのかは、クロロからみんなに説明してもらい、プラチナは離れたところで、クーとケーキを食べている。

結局大騒ぎになりすぎ、クロロにクラピカの事を話すきっかけがなく、明日伝えることに。

クラピカどうなるのかな？  
なぶり殺し？  
ノブナガ殺る気満々だしね。

気持ち分からなくもないけど、ウボォーを殺したのは許せない。どうしてくれようか・・・ クロロの判断に任せよう。

第21話 9月3日 ? (後書き)

グダグダになってきちゃいました・・・

クラピカ達は、原作通りにしたいと思ってます。

すこし、間があきそうです。

これからもよろしくお願いします！

見捨てないで～～～

第22話 9月4日？

昨晚の大騒ぎが終わり、皆が起きて集まったのは昼だった。

クロロが今夜にはアジトを出てホームに戻ると言った。それを聞いたノブナガは納得できず、抗議をするが、クロロは返答せず、ノブナガに生年月日・血液型・名前を聞き紙に書くように指示した。

ノブナガは困惑しながらも渡された紙に記入し、団長に渡す。クロロは、ネオンの念能力を使い、自動書記による予知を書き記した。占いには、来週5人の団員が死ぬことがでていた。占いの詩を声をあげて読みあげると、シズクがクロロに自分を占って欲しいと声をかけた。占いの結果、来週死ぬのは自分だと話した。

クロロは自分とノブナガの占いを解説し、今週中にホームへ戻り鎖野郎と戦わなければ蜘蛛が半分になる事はないと言った。もし残れば、シズク・シャル・パクノダは確実に死ぬ。ウボオーやノブナガは特攻だ、死ぬことも仕事の一つ・・・ノブナガは話を聞いて納得した。

残りのメンバーも占うことになった。シズクのように危険回避の助言が出ているかもしれないので、団員に生年月日・血液型・名前を記入するよう声をかけるが、フィックス・フェイタン・コルトピは情報不足で占う事が出来なかった。

「・・・・・・・・」

「どんな占いが出たの？ 見せて」

「やめた方がいいと思うよ？ 見たら驚くからね」

「いいから」

パクノダがヒソカに声をかけ、占いを見せてもらった。驚いたパクノダは他の団員にも見るように勧め、渡した。占いを讀んだ団員は驚き、特にノブナガは怒りに震えていた。

「てめえがウボオーを売ったのか！」

「まあ、待ちなよ。団長が行動によっては回避も出来るって言うてたじゃないか」

「ちっ…… とうなんだ!!」

聞かれたヒソカは、言えない？ でも、一つ目の詩は事実だけど？ と話した。なぜ、言えないのかシャルナークが聞くと、言わないじゃなくて言えない？ これで納得できないならボクも自分を守るために戦うよ…… ノブナガは怒って斬りかかるが、クロロに止められ話を聞くことになった。

鎖野郎が最低でも二つの能力を有する敵だとうこと。一つ目はウボオーを捕えた時の能力、もう一つはヒソカの言動を縛る能力。おそらく後者は相手に何らかのルールを強いることが出来る…… クロロの話をシャルナークがまとめ、鎖野郎は具現化系か操作系ではないかと予測された。

ヒソカの占いには、蜘蛛がホームに戻れば団員が半分死ぬと予言が出ていた。

「半分まであと一人……他に死の予言が出ていたものはいないか？」

「情報不足のオレかフェイタンかコルトピの誰か1人だな」

フィックスがクロロにそう話しかけた。

ヒソカと自分の予言を考え、クロロはアジトに残る事を決断。鎖野郎と戦ったウボォーをプラチナに召喚してもらい、詳しく話を聞きたいとプラチナに言った。すると、プラチナが答えた。

「鎖野郎の名前知ってるよ。緋の眼の奴でウボォーに復讐した奴・・  
・クーも間違いないって教えてくれたしね。昨日の会場にも来てた。」

「お前知ってたのかよ!! 何で言わねえんだ!!」  
「でもそいつ、半年程前のハンター試験一緒だったけど、念知らなかったんだよ? ウボォーを殺して復讐したのがそいつって思わなかったんだもん・・・」

ノブナガが言いよって来るのに、言い訳をしながら後ずさると、パクノダが間に入り落ち着かせた。

「名前は、クラピカ。クルタ族で金髪美人、オークションで? 緋の眼? を落札してたよ」

「コルトピ、コピー商品の場所がわかるか?」

「ボクのコピーは? 円? の役割もするからわかるよ。本物を触れればだけどね」

団員全員で? 緋の眼? を段ボールの山の中から探し出し、コルトピに渡す。

「あっちの方角に・・・2500m 同じがある。コピーは一日で消えるから急いだ方がいいよ。昨日の夜にコピーしたから、あと数時間で消えるから」

「地図はあるか?」

クロロは地図を見て、該当するホテルをつきとめた。ホテルベ-

チタクル・・・

鎖野郎を殺すため、班を決めて行動するここに。フィックス・フ  
エイタン・シャルナーク・ヒソカ・ボノレノフ・フランクリンは待  
機。シズク・パクノダ・マチ・プラチナ・コルトピ・パクノダはク  
ロロと一緒に行動することになった。

行動開始をしようとした時、マチがクロロに話しかけた。

「団長、子どもがこの場所を知ってるんだ。鎖野郎とは関係なかつ  
たけど、気になるんだ・・・」

「子ども？」

「ああ！！忘れてた！！団長、そいつの入団を進めるぜ！！」

「ちよつと、そんなつもりで話したんじゃないよ！！」

「？」

ノブナガは尾行してきた子ども2人について腕相撲した時のこと、  
逃げられた時のことを話し入団を強く勧めた。話を聞く限りその子  
どもは入団しないのでは？とクロロは言ったが、ノブナガは説得  
するから一度見てくれと言い募り、保留することになった。

マチはなんとなく勘で気になると言った。クロロはマチの勘は当  
たるので、コルトピにアジトのダミーを増やすように指示をした。

コルトピがダミーを50棟増やし、どれか一つにでも誰かが侵入  
したらすぐわかると話した。

鎖野郎の目的・居場所も判明し動き始めるなか、プラチナは自分  
の占いが気になりクロロに話しかけた。占い内容を見せる。

大切な暦が一部欠けて

遺された月達は盛大に葬うだろう



霜月は死の先を逝き  
女神の迎えを待ちわびる

死神に顔を見せてはいけない  
暦がさらに欠けてしまうから  
黒を追いかけなさい  
緋の眼から蜘蛛を逃がせるだろう

気持ちを更新にし  
逆十字と共に行くのがいい  
奇術師が遊びに来て貴を誘う  
楽しめば楽しむほど良い事がある

クロロは占いを見た後、フードをかぶって顔を隠すようにし、ク  
ーが何処にいてもわかるかと聞いてきた。レナスの時ならばわかる  
と答えると、設定を変更してから出発することになった。

クロロは団員へ、プラチナとクーが蜘蛛が生きるための鍵になる  
とし、行動を止めるなど言った。団員は了解し、行動を開始した。

クラピカは占いによると死なない。けど、クーちゃんを見失うと  
蜘蛛の誰かが死んでしまう。皆は家族みたいなもの・・・ 頑張ろ  
うと気を引き締めたプラチナはクーちゃんを肩に乗せ、クロロ達の  
後を歩いて行った。

第22話 9月4日 ? (後書き)

・・・あまり進まなかったです。

今回は、キルアとゴンが登場する予定です。

感想ありがとうございました！

これからもなるべく、キャラを大切にしていきますー！ー！ー！

第23話 9月4日？

ホテルに行くには電車に乗る必要があるので、駅に向かった。

プラチナはウボォーに買ってもらった最後のクッキーを食べながら電車で揺られる。すぐに目的の駅に着き、電車を降りた。シズクが地図を見ながら進む方向を言う。集団で歩いていると、コルトピがコピーの？緋の眼？が上から下へエレベーターで移動を始めたことに気付いた。

クロロの合図で走って追いかける。その間にも動きを探っていたコルトピは？緋の眼？が車で移動していると、移動している方角を指で指示しながら団長に伝えた。

プラチナの肩に乗っているクーがクロロに向かって鳴いた。クロロは頷き、尾行されていることを団員に伝え、車をノブナガ・パクノダ・コルトピ・プラチナが追いかけて、マチ・シズクはクロロと尾行している者を相手することにした。クロロの合図で分かれた。

コルトピの誘導で車に追い付いた。乗っていたのは黒髪の男と犬だった。

「ハズレ〜 クラピカじゃなかったね」

「居場所でも答えてもらおうかしら？」

「動いたら、殺すからな」

「俺は何も知らないんだ！！」

ノブナガが動いたら殺すって言ったのにね・・・

首を切られて死んだ男を見ていたら、パクノダが念能力で情報を

伝えた。分かった事は、娘のボディガードだったこと、センリツという心音から心理状態がわる仲間がいること、何処にいるのかは知らないということが分かった。

ホテルに戻り、クロロと合流することになった。

ホテルで合流すると、子どもが2人増えていた。

「おお！！ お前らまた尾行失敗したのか！？ これも何かの縁だ、入団しろよ」

「嫌だね！ 誰が入団するもんか！！」

「オレも嫌だね！ フン！！」

2人は眼をつむりそっぽを向いた。ノブナガはクロロにも子どもの良さを勧めえるが、クロロはパクノダに何を隠しているのか聞くように指示した。プラチナは2人の前に立ち、クラピカの友達のキルアとゴンだと教えた。

「友達か・・・なおさら何か知っているだろう」

「そうね、坊や教えてちょうだい。何を隠しているの」

「（何で名前がばれてるんだ！？）」

パクノダが質問したその瞬間、ホテルの電気が消えた。キルアがマチの糸から抜け出してパクノダの腕を折り、マチの脇腹を蹴り飛ばした。 gon はパクノダの顔を蹴り上げ、逃げようとした時にマチに引つ張られた。キルアが gon を自由にするためにマチを殺そうとした時、プラチナが間に入りキルアの腕を掴んで後ろにひねり床に押さえつけた。 gon はキルアを助けようとしたが、ノブナガに足を掴まれ動けなくなってしまった。

気が付くと、団長・クーがいなくなっていた・・・

柱にナイフが刺さり手紙が付いていた。ノブナガが読み、パクノダに渡した。内容は？2人の記憶、話せば殺す？だった。ノブナガは考え込むパクノダに「お前は一言も話すな」と言い、マチに2人をしっかり糸で縛り自分が持つてフィンクス達を待つと言った。

ノブナガはフィンクスに電話をし、団長が連れ去られたから早く来いと伝えた。

フィンクス・フェイタン・シャルナークが到着した。反省会をしているとフィンクスの電話に団長から着信が入った。パクノダに変わり内容は、追いかけるな、人質に危害を加えるな、1人で空港に来ることだった。パクノダは1人で行動し、他の団員はアジトに人質を連れていくことにした。

人質をシャルナークが逃がさないように歩いている。プラチナは最後尾を歩いているコルトピに近づき、クーを追いかけるから皆に優しく伝えてグループから離れた。

皆を見送りある程度離れてから、プラチナは銀翼を出し空に飛びあがった。

クーの気配を追っていくと、飛行船が航行していた。入口を探して入ると、クーからの念話が届いた。

『プラチナーッ クロロが鎖刺されてパクにも刺そうとしてるの！！ 急いで！！ ぎゃあ！！』

プラチナがドアを開けて駆け込むと、クラピカがパクノダを鎖で

刺そうとしていた。腰に装備していたナイフを念で強化して投げ飛ばし、鎖を弾き返した。クーは壁に叩きつけられたようであっていた。

プラチナはパクノダの前に立ち？エリクサー？をクーに使い回復させた。クーは起き上りプラチナに近づいて行く。プラチナは肩に飛び乗ってきたクーを撫で、クラピカを威嚇しないよう落ち着かせながらクラピカに話しかける。

「クラピカ、どういうこと？」

「君は、プラチナか・・・なぜ邪魔をする！！」

クラピカと会話をしながら、今まで何があつたのか念話でクーから話を聞いた。ククロの心臓には？ジャッジメントチェーン律する小指の鎖？が刺され、守らなければならない約束は2つ。1つは今後念能力の使用を一切禁じること、2つは今後旅団人との一切の接触を断つことだった。パクノダには1つ午後0時までにゴンとキルアを小細工をせず無事に解放すること、2つクラピカについて一切話さないこと、この2つの約束で刺そうとしていたようだ・・・間に合つてよかった。

「プラチナ、私は良いの。だから皆のところへ戻ってちょうだい」

「良くない！！クラピカとは私が話をつけるから、パクは黙つて！！」

「君は旅団をかばうのか！？クルタ族はこいつらに虐殺されたんだぞ！！」

「・・・・・・でも、泉に捨てられた私を育ててくれたのは団員皆よ。どうしても復讐するのなら、私は貴方を許さない。皆は私が守るんだから！」

話を聞いていたセンリツがクラピカに向かって「彼女は嘘を付い

てないわ、本気よ」と話した。

クラピカはプラチナから視線をそらし、クロロを睨みながら考え込み、プラチナに話しかけた。

「・・・君が私のことを旅団に話さず、ゴンとキルアを小細工をせず無事に解放するなら私も人質を解放しよう。約束は守れるか!!」  
「もちろんよ」

「念の為、パクノダに？ジャッジメントチェイン律する小指の鎖？を刺す。もし、君が約束を破ればパクノダの心臓は潰れて死ぬだろう。約束を守ったなら、人質交換後に鎖をはずそう」

「・・・分かったわ、パクもそれでいい？」  
「OKよ」

クラピカはパクノダに鎖をうつた。人質交換はゴン・キルアだけを連れてくること、旅団は連れて来てはいけない、何処へ行くかも話してはいけない。飛行船が空港に戻り、プラチナがクーにクロロのことをお願いすると、クーはクロロの肩に乗り降りて行くプラチナとパクノダを見送った。

アジトに付いた2人は団員、特にフィックスとフェイタンの説得が大変だった。クラピカの確認の電話も入った。なんとか納得してもらい、ゴン・キルアを連れて4人で空港に向かった。

空港に到着。乗り込もうとした時、ヒソカがやって来た。ヒソカはクラピカに電話し、一緒に乗り込むことになった。何か事情があるようだ。

目的地に到着し、人質を連れて降りるとクラピカから電話が入った。キルアに渡すと携帯を胸に当て、センリツに心音を聞かせて異常が無いか確認が終わり、人質を交換することになった。

ゴン・キルアはクラピカ達の方へ歩き、クロロがプラチナ達の方へ歩いてくる。人質交換が無事に終わり、クラピカはパクノダの鎖を解除し飛行船に乗って帰って行った。

クラピカは飛行船に乗り込む前、プラチナに何か言いたそうにしていたが結局何の言わなかった。

複雑な気持ちは、何となくわかるけどね……

パクノダはクロロに何も言わず、飛行船へと歩いて行く。プラチナが追いかけて話しかけた。

「パク、私クロロと一緒に行くね。皆によろしく言つていて」

「にやうんにやゝ（また あそぼうね）」

「わかったわ、ちゃんと団長の言う事聞くのよ？ お腹出して寝ないのよ？ ケーキばかり食べないのよ？ 後で皆に電話するときなさいよ？」

「はい、いつてきます！」

「いつてらっしゃい」

プラチナがクロロの所へ行こうとすると、ヒソカが半裸で近づいて話しかけてきた。

「やあ？ クロロ念が使えなくなつたんだね？ せっかく旅団をやって戦おうと思ったのに残念？」

「旅団抜けたの？」

「もとから入ってなかったのさ？」

「え！？ そうなんだ」

「クロロと行くのかい？」

「行くよ」



「それじゃ、またね？」

「うん、ばいばい！」

ヒソカが飛行船に乗り込むと、飛行船はゆっくりと飛んで戻って行った。

プラチナがクロロとクーに近づくと、クーが肩に飛び乗って来た。クーを撫でながらこれからどうするのかクロロに聞いた。

「オレの占いには？東に行くといい？とあった」

「んじゃ東に行くの？」

「まずはこの岩山から降りようか・・・」

「レッツゴー」

「にやうにやー！（れつつらー・・・！）」

プラチナとクーはクロロの後を追いかけて、東に向かって旅をすることになった。

第23話 9月4日 ? (後書き)

矛盾してるかもしれません。

パクノダが原作通りじゃなく、死なせないことにしました。  
納得できない人もいると思うけど、許してーーーー

次回は、番外編もしくはグリードアイランドに突入したいと思います。  
す。

第24話 東に行きましょう（前書き）

プラチナ暴走中・・・

## 第24話 東に行きましょう

ヨークシンに戻って来たクロロとプラチナ・クーは、ホテルで一泊した。

プラチナとクーは出発前にクッキーを買い溜めし、クロロと一緒に東行きの飛行船に乗り込んだ。

「何読んでんの？」

「不思議の国のアリス」

「・・・・・・へ？」

「ははっ、冗談だ」

到着するまでクロロは読書をし、プラチナとクーは探検をしたりクッキーを食べたりして過ごした。飛行船が目的地に到着。クロロとプラチナは手をつないで飛行船を降りた。

宿泊するホテルを決めた後、晩ご飯の時間まで街を見てまわる事にした。

まずは最初に見つけた古書屋に入った。気に入る本があったようで、4冊購入。プラチナとクーはケーキ屋さんでケーキを食べたが・・・ヨークシンのケーキ屋さんの方が美味しかった。

レストランで晩ご飯を食べてからホテルに戻った。

シャワータイムです！！ そのお兄さんお姉さん、お湯も滴るいい男を見に行きたいと思います！

スッ・・・スッ・・・ 忍び足で浴室を目指します。

あと少し・・・・・・・・・・ それでは、ドアを開けます。 カチャ・

ザアアアーーーー ターゲットのシルエットが！！！！

（プラチナ、鼻血が出てるよ・・・）

鼻血などどうでもいい！！ いざ行かん！！ クロロが私を待っているーーーー！！！！

「クロロー 一緒に入っていあばあばあーーーーー」

「お前も変態だったか・・・ クーはおいで、久しぶりに洗ってあげよう」

任務失敗・・・ お風呂の扉を開いたとたん、シャワーが顔面にかかりあまりの熱さに転がって悶えていると無情にも変態の烙印を押されてしまった・・・・・・・・・・ なぜばれた！？ 私は何処で失敗したのだ！？ 絶は完璧のはずだ・・・・・・・・・・ 次こそは、次こそはーーーー！！！！ 遂行してみせる！！ こうなれば修行あるのみ！！！！

プラチナの変なスイッチが入っていたその頃、クーはクロロに身体を洗ってもらい一緒に湯船に浸かって寛いでいましたとさ・・・

クロロがクーを抱えてお風呂からあがってきた後プラチナは、次に変な事をしたならば甘い食べ物を禁止にすると宣言され、計画を中止せざるを得なくなったようだ。

次の朝、さらに東を目指して2人と1匹は列車に乗り込んだ。

プラチナからお兄さんお姉さんへ？

シルエットでの腰のくびれが素敵でした。気配の消し方をより高度なものへと進化させ、再度挑戦したいと思います。成功した時は報告しますので、お楽しみに！！！！

懲りないプラチナにクロロの鉄槌がくだる日はそう遠くないようだ。

## 第24話 東に行きましょう（後書き）

前話の誤字を教えてください、ありがとうございます！  
これからも、誤字を発見して教えもらえたら嬉しいです。

次回は、ヒソカが出る予定です。

## 第25話 ゲームをしましょ

列車から降りたプラチナ達は、港町に到着。

ここから東に行くには船が必要だと分かり、停泊しているクルーザーを盗むことにした。

クロロが運転するクルーザーで東を目指した。

二日目の朝に島が見えた。船を近づけ、島には泳いで上陸。

びしょびしょなんですけど・・・

「プラチナ、おいて行くぞ」

「気持ち悪い〜」

「我慢しろ」

「にゃんにゃん (がんばって)」

プラチナがクロロに追い付くと、男性が前方にあらわれて話しかけてきた。

「侵入者がきたのは久しぶりだね」

プラチナは、念が使えないクロロを守るように前に出て、クーをクロロの肩に乗せた。

「・・・何？」

「一応聞くが君たちは漂流者なのかな？ 潮流の関係で波まかせでは絶対に着けない島だな」

「それで？」

「私はレイザー、このゲームの製作者の一人だ。侵入者には退場し



てもらおう、正しく入島するなら歓迎するよ　？排除？<sup>エリミネイト</sup>　使用！！<sup>オン</sup>  
「クーちゃん！！」

？排除？<sup>エリミネイト</sup>　G・Iに不当な方法で侵入した者すべてをアイジエン大陸のどこかに飛ばすガード

プラチナがクーに声をかけた瞬間、クーはクロロにしがみつ一緒に飛ばされた。プラチナはクロロ達とは別に飛ばされてしまった。

「子どもなのに強そうだ・・・」

レイザーは念弾で、クロロ達が乗ってきたクルーザーを爆破して片づけた。

アイジエン大陸に飛ばされたプラチナは、すぐにクロロに電話をした。

「なんだ・・・」

「なんだじゃない！！　クーちゃんも大丈夫？　どこに飛んだの？」

「飛行船で行った街のホテルで合流だ・・・　にやうあ！（はやくきてね！）」

「わかった、すぐ行くね」

プラチナは電車で空港に向かい、いそいで街をめざした。

次の日の昼すぎに、ホテルに到着。

ロビーからクロロに連絡をすると、7044号室にくるように言われた。

7044号室の前にきて、ドアをノックしようとした時、内側からドアが開いた。

「やあ？ やつぱりプラチナだ？」

「！！！！」

出たーーーー！！！！

ヒソカは、驚くプラチナの背を押して、部屋に招き入れた。部屋の中では、ソファーに座るクロロの膝でくつろぐクーに、マイペースに読書をするクロロがいた。

プラチナはヒソカと一緒に、クロロの向かい側のソファーに座る。

「ケーキでも食べるかい？」

「うん、食べるけど…… 何でヒソカがいるの？」

「…… 依頼したからだ」

「そう、ボクは仕事できたんだよ？」

「へえ、そうなんだ」

ヒソカが、ルームサービスで注文をしたアフタヌーンティーセットがきた。

クロロの膝でくつろいでいたクーが起きて、プラチナに声をかけた。

「にやうにゃーん （ボクもたべたい）」

「はいはい、元気そうでよかった。心配したんだからね」

「にやにやうあ！ （だいじょうぶだったよ！）」

「んじゃ、食べよつか？」  
「にゃー（たべるー）」

クーは、クロロの膝からプラチナの膝に引越して、一緒に食べはじめた。

ケーキやスコーンを食べおわると、クロロが本を閉じ、調べてわかった事を話した。

あの島は、グリードアイランドG・Iというゲームが行われている島だということ。

ゲームを製作したのは念能力者で、ゲームで遊べるのも念能力者のみ。クロロの占いにでていた、東にいる待ち人は、ゲームに参加している可能性が高いこと。しかし、念が使えないのでヒソカに依頼をした。成功報酬は、除念後に戦うこと。

「除念？」

「かけられた念を、はずせる能力のことだ」

「はずせるの!？」

「当たり前だろう・・・ヒソカにはグリードアイランドG・Iで除念者を探し出して連れてきてもらう」

「よかった!! ヒソカ頑張ってたね」

「プラチナも行くんだよ？」

「へ!？」

「1人より、2人の方が早く見つけられるからね？」

こうして、プラチナはヒソカと一緒に、グリードアイランドG・Iをプレイすることとなった。

「準備はできてるから、すぐに始めるかい？」

「あの島に行くの？」

プラチナが島に行くのかヒソカに聞くと、ゲーム機に念をして手

をかざすと、島に飛んでいけると教えてくれた。まず、見本として先にヒソカが行くことになった。

「それじゃ、向こうで待ってるよ？」

「うん、待っててね」

ヒソカが、ゲーム機に念をして手をかざすと消えた。

おお～～～ 本当に消えた！！

ヒソカが消えた事にプラチナが驚いていると、クロロが声をかけた。

「プラチナ、クーは本に一度戻して、向こうに着いてから出せ」

「はい、クーちゃんまた後でね」

「・・・ お前の占いに？ 楽しめば楽しむほど良い事がある？ とあつただろう？ 楽しんでこい」

「そうする！ それじゃ、行ってきます」

「ああ、気をつけろよ。変態とかにな」

プラチナも消えた部屋で、クロロは1人静かに、本の続きを読むことにした。

変態のことは気になるが、プラチナなら大丈夫だろう・・・

## 第25話 ゲームをしましょ（後書き）

グリードアイランドに突入しました。

今回は、ヒソカと遊んでいる様子を書く予定です。

これからも、よろしくです。

第26話 G・I ヒソカと蜘蛛（前書き）

遅くなりました

## 第26話 G・I ヒソカと蜘蛛

プラチナはヒソカと共に、G・I シソの木に到着してすぐに、『ヴァルキリー』からクーを召喚して定位置の頭にのつけた。

遠く離れた場所から2人を観察する気配がおしよせる。

プラチナが周囲を見回し、視線を感じる方向を睨んでいると、ヒソカがプラチナに話しかけた。

「とりあえず、街を目指そうね？」

「はい……視線がうつとうしい!!」

「にゃんあ（ほっとこうよ）」

「その通り？」

「……ぶう！」

ヒソカは、ぶうたれるプラチナの口にアメ玉を入れて、街を目指して歩き始めた。

ヒソカって優しいよねえ　いちごアメ大好き

プラチナがご機嫌で歩いていると、魔法都市マサドラに着いた。

「ここで、旅団の誰かが来るのを待つとするよ？」

「………なんで？」

「ボク達がここに来た理由は、クロロの為に除念師を探すことですよ？」

「……だから？」

「彼らも捜しにG・Iに来るはずだからね？　協力すれば見つけやすいだろ？」

「……でも、待たずに電話すればいいんじゃない？」

「それじゃ、面白くないよ?」

「そういつもん?」

「そういつもん?」

旅団が来るまで、魔法都市マサドラで待つことになった。

「暇!!!!!!」

プラチナが大きな声で叫んだ。

初めのころは、食べ歩いたり、街を探検して遊んでいたが、飽きてしまったようだ。

「じゃあ、狩りでもしてカードを集めるかい?」

「やだー めんどくさいじゃん!」

「何をするんだい?」

「.....考え中」

「にゃー にゃー (かんがえちゅー かんがえちゅー)」

旅団の誰もまだ来ないし、何か面白いことあるかな?

そうだ! 変態のヒソカに教えてほしいことがあったよー 皆様、

覚えているでしょうか? あの失敗した日のことを・・・ 変態の

ヒソカならば、覗きスキルを持つているはず! クロロの入浴姿を

この目で見られる日も近い!!!!

「ねえねえ、覗きツて得意でしょ?」

「..... 突然なんを言うのかな?」

「あのねえ、カクカクシカジカでしてねえー」

「ほう..... キミって変態だね?」

「いえいえ、貴方ほどもないですよ・・・」



「フフフフ、協力しようじゃないか。そのかわり、ボクも一緒に見てもいいかい？」

「お主も悪よのうゝ ぐへへへへ」

「キミこそね？ フフフフ？」

「にゃんにゃ （しらないよ）」

そのころ、ホテルの一室で読書をしていたクロロの背中に悪寒が走ったそうな……

ヒソカは？ 絶？ の巧妙な仕方を教え、プラチナはスポンジが水を吸い込むがごとく学んでいた。

ここに、変態の師弟関係が育まれ、新たな変態が誕生しようとしていた。

「キミも立派な変態だね？」

「これなら、成功するかも！！」

「そうだね？」

「にゃゝ （プラチナがゝ）」

修行も終わり、魔法都市マサドラでおやつケーキを食べることにした。

紅茶を飲んでまったりしていると、ヒソカが急に顔をあげ、ある方向を向いて笑った。

「来たみたいだね？」

「え！？ ほんとだ！」

「さあ、後について行くよ?」

「はい」

「じゃあー（れっつごー）」

森の中に入り、シャルナークの笑い声が聞こえてきた。声によると、シャルナークの他に、フィックス・シズク・パクノダ・フランクリンがいることが分かる。

除念師がG・Iグリードアイランドにいることに気づき、クロロの名前を使っているプレイヤーに引き渡すと話していた。

クロロの名前?　もしかして・・・

プラチナは前を歩くヒソカの服の裾をひっぱって、話しかけた。

「ヒソカ、名前をクロロで登録したの?」

「そのとおり?　わかりやすいだろ?」

「たしかに・・・ヒソカって賢いね」

「どういたしまして?」

プラチナと話し終えたヒソカは、訂正もふくめて、シャルナーク達に話しかけた。

あらわれたヒソカに、フィックスが怒りながら話している。

フィックス、そんなに怒ってたらハゲるんじゃない・・・

「プラチナ!!　てめえ失礼なこと考えただろ!?」

「なんのことかな?」

「てめえーーーー!!　ヒソカに汚染されてんじゃないやねえーよ!」

「プラチナ、とりあえず謝んなさい」

「はい・・・ごめんなさい」

「おう」

パクノダが2人の間に入り、なかなかおりをさせた。

お兄ちゃんが怒っても怖くないけど、お母さんを怒らせると怖い  
です・・・

「・・・プラチナ、何を考えてるのかしら？ 触るわよ」

「！！ 何でもないです！！」

「にゃゝ（ばかゝ）」

旅団との話もおわり、プラチナは再びヒソカと一緒に行動するこ  
とになった。

「プラチナ！ 変態には気をつけるのよゝゝゝゝゝゝゝ！！！」

パクノダの声かけを聞いたフィックスは、手遅れな気がする・・・  
と感じていた。

## 第26話 G・I ヒソカと蜘蛛（後書き）

2月に入って、急に忙しくなりました。

G・Iの最後まで頑張ります～

これからも、よろしくです。

感想などあればお願いします～～～

## 第27話 G・I ゲームマスター？

シャルナーク達と別れたプラチナは、ヒソカと遊ぶために次の町を目指した。

恋愛都市アイアイ に到着。

ベタベタな出会いが楽しめたけど・・・ やっぱりヒマだな

「プラチナ、この近くに泉があるんだけど？ 泳ぎに行くかい？」

「行く！！」

「にゃー！（いくー！）」

プラチナはヒソカの後を付いて行き、泉に到着した。

透き通るようなキレイなブルーの泉で、魚が泳ぐ姿が見えている。

「泳ぐぞーー！ クーちゃんも一緒に泳ごうー！」

「にゃー（およぐー）」

「フフフ、可愛いねエ？」

ペロリ？

・・・ ロリコンだったわけ？

プラチナはヒソカの視線を気にせず、クーと泳ぐことを楽しむ。泉にもぐって魚を追いかけたり、どれだけ長くもぐれるか競争したりしていると、何か変なのが見えた。モザイクが必要なのが・・・ 何で服を全部ぬいでハダカで泳ぐかな！？ 髪の毛おろしてて力ツコイイと思うけど、下着は着たままで泳ぐでしょーよ。チラリズムがいいのにさ、丸見えじゃワクワク感がないじゃん！！

「プラチナの考えは、変態っていうんだよ？」

「知ってます！ パンツはちゃんとはいてよねー！」

「残念、驚く姿が見たかったのにね？」

「べ〜〜！」

プラチナはヒソカから離れて、クーと遊びはじめた。  
すると・・・ 誰かが飛んでくるのが見えた。

「おや、プラチナ！ めずらしいお客さんが来たよ？」

「お客さん？」

やって来たのは、ゴン・キルア・ゴリラみたいな人・女の子だった。

「その声は、ヒソカにプラチナ！？」

「久しぶり？」

「にゃ〜 （キルアだ〜）」

プラチナと泳いでいたクーは、キルアを見つけるといそいで岸に上がり、キルアの胸に走って跳びこんでいった。

「うわぁー、おまえ元気にしてたか？」

「にゃうにゃー （げんきにしてたよー）」

「やつぱいいタイミング返事するよな、おまえってさ」

「ばか！！ ？疑<sup>キョウ</sup>？をしなさい！！」

「イデ！！ 何なんだよクーに？疑<sup>キョウ</sup>？しろって・・・え！？」

「キルアすごいよ！ クーって念字ができるんだ！」

「げんきにしてたよーだつてさ！！ おまえスゴいなあ！」

キルアがクーを抱き上げて、ゴンと一緒に念字を読み、もりあがっているヒソカが話しかけた。

「何をしに来たのかな？」

「！！！」

「ずいぶん成長したね、臨戦態勢になるとよくわかるよ？ いい師に会えたようだね？ ボクが思った通り、キミ達は美味しく実っていく……？」

さすがヒソカ、かなり変態だけど強いよね。

ゴンが話しはじめた。どうやら、クロロの名前を見つけて本人がどうかなのと、何をしにG・I<sup>グレイ</sup>に来たのかを聞きに来たようだ。

プラチナは、ヒソカが何と答えるのかを見守ることにした。

どうやらヒソカは、クロロを探しに来ていることと、クロロの名前にしたのは旅団に除念師の存在について教えたいので名前を借りていると話していた。

みんなと会ったこと、内緒にするんだね…… ひみつつて面白い！

「それじゃ、こっちが聞く番…… さっきの質問をするためだけに来たわけじゃないだろ？」

「それだけ！」

「こいつ直接会うつてきかなくてさー」

「……」

「あの、実はかなり強い人を探してて、私達の仲間になって下さ  
いませんか？」

「いいよ、ヒマだから？ プラチナはどうするんだい？」

「一緒にいく！」

「強い人を仲間にした<sup>ワケ</sup>い理由は？」

「ええええええ！！ ビスケちょっとまってよ！！」

「オレは反対だ、あいつはかなり危険だぞ！？」

ビスケと呼ばれた女の子が、キルア達を説得して、一緒に行くこ  
とになった。理由は、レアカードゲットの為に15人仲間が必要ら  
しい。

プラチナ達は、ヒソカに服を着せて一緒に行くことになった。

一度、恋愛都市アイアイに戻ることにした。

恋愛都市アイアイで、さらに仲間を集めるためにツエズゲラとい  
う人に連絡を取ることになった。

ゴンがヒソカに？<sup>コンタクト</sup>交信？の使い方を教え、ヒソカがツエズゲラに  
半径200m以内に会ったことがあるのか調べる。

名前があつたので、ヒソカが呪文を唱え、ゴン達が交渉をするこ  
とにした。

ツエズゲラに会って交渉することになり、移動することに。

交渉は成立。

ヒソカは、リフティングを担当することになった。

プラチナは、ゴンと一緒にツエズゲラとバレーボールを担当する  
ことになった。

………なんとかなるかな？



一週間後、全員一緒に？<sup>カンパニー</sup>同行？でソウフラビへ向かった。

## 第27話 G・I ゲームマスター？（後書き）

ツエズゲラとの交渉場面、はしょっちゃいましたー

次は、ドッジボールをメインに書く予定です。  
それでは、また読みに来てください！

## 第28話 G・I ゲームマスター？

ボクシング・ボーリング・フリースローは、順調に勝ち進むことが出来た。

今回の挑戦者を観察していたレイザーは、後は適当に負けると指示をする。15人のうち、7人の戦闘レベルに申し分ない。後はオレが遊んでやるうじゃないか・・・

レイザーの指示に1人だけ従わなかった奴がいた。ボポボという奴だ。ボポボはレイザーの指示を無視し、このくそゲームに付き合つてられるか！！と叫ぶ。レイザーが契約違反になるぞと声をかけるが、ボポボはそれを無視し、他の仲間にレイザーを殺して一緒にこの島を船で脱出しようと声をあげた。だが、レイザーの念弾によつてボポボの頭を吹き飛ばされたのだった。

レイザーはボポボの死体にむかつて、タブーを破つたら厳罰・・・殺されないとでも思つたかバカが！とはきすてた。

それを見ていた人数合わせの人達が、あんな連中とは戦いたくないとわめく。ツエズゲラ達が戦わなくていいと必死に説得することができ、ボポボの不戦勝の分を人数合わせの中から選び、こちらは4勝となった。

レイザーがボールを持つて前に出る。今から始めるのはドッジボールだ、8人メンバーを決めると言い、レイザーは念能力で7人のメンバーを創りだした。

人数合わせの人達は死にたくないと呼び、我先にと逃げ出して行った。ツエズゲラは引き留めようとするが、ゴンが命がけなんだか

らオレ達だけでしようと言い、レイザーに7人でいいだと話しかけた。

「ダメだ、何のために15人仲間を集めさせたと思っている。ルー  
ルは守ってもらおう」

「ふざけるな！！ お前は1人じゃないか！！」

ゴンがレイザーにくっついてかかった。

元気〜 それにしても、ゴンってお子様だね・・・ 現実の世  
界だつて知らなかったのにはビックリ！！ ツエズゲラが説明しち  
やったから、ヒソカが残念がつてる。私にはどうでもいいことだけ  
どね。

プラチナがゴンとレイザーの話を聞いていると、ゴンがジンって  
名前の父親を探していることと、レイザーがジンの息子が来たら本  
気で相手をする約束をしたことがわかった。

ガチで勝負するの？ 熱血つて嫌いなんだよね〜 でも、あと1  
人メンバーが足りないんじゃない？

プラチナがメンバー不足をどうするのかと疑問に思っていたら、  
ゴリラみたいなゴレイヌが、念獣を1匹だしてドヤ顔で言った。

「オレが2人分になる。これで大丈夫だろう」

「ああ、それじゃ始めるとしようか・・・」

ゴリラのゴレイヌの念獣が外野にでて、他のみんながコートの中  
に入っていく。プラチナは自分が入るうか悩んでいた。

「どうしたんだい？ はじまるよ？」

「うゝん、私ボール競技ダメなんだよね・・・ クーちゃんする？」

「にゃんにゃうな！（ボクにぼーるはもてないでしょ！）」

「たしかに・・・」

ヒソカとクーと話していると、ゴリラのゴレイヌがやって来た。

「君はやらないのかい？ オレの念獣ならあと1匹だせるが？」

「うゝん、どうしようかな・・・」

「にゃうにゃにゃうんにゃ？（ウボオーだしたらいいんじゃないの？）」

「！！！！！ そうだよな、クーちゃんかしこい」

「大丈夫なのか？」

「大丈夫、すぐに変わりを出すから！」

プラチナはコートから離れて『ヴァルキリー』を出して、まずは自分をレナス（24歳・アース神族）に設定を変更する。そして、銀翼を出して召喚をはじめた。

「死の先を逝く者たちよ！」

銀翼からでた光の粒が一ヶ所に集まり、人型を形成していく。その人型は大きく、プラチナのよく知る人物へと変わった。

「うおおおお！ 久しぶりだなプラチナにクーー！！」

「ひさしぶり〜 今日はね、私の代わりにドッジボールしてほしいんだけどいい？」

「ドッジボールって何だ？ どうすりゃいいんだよ」

「ボールを敵に当てて、敵チームの中に入ってる人を全員当てたら勝ちなんだ。わかる？」

「おう！ あてりやいいんだな！」

「そういうこと、よろしくね」

「まかせろ！！」

ウボオーがコートに入って行くのを見て、プラチナはまだ出していた『ヴァルキリー』で設定をメルティナー（23歳・魔術師）に変更し、コートに近づいていく。

「私の代わりに、この人がするからよろしくね」

「かわった能力だね？ キミはやっぱ面白いよ？」

「おお！ ヒソカじゃねエか、暴れようぜ！！」

「でか・・・」

ゴン達にウボオーを紹介すると、大きさに驚いてます。そりゃビツクリするよね？ ギョンの倍は身長差がありそうなんだもんね。プラチナはレイザーに近づき、質問をした。

「ねえねえ、はじめる前に体力強化してもいい？」

「かまわないよ」

「んじゃちよつと待つてね」

プラチナはギョン達に声をかけ、集まってもらい呪文を唱えた。

「マイト・レインフォース！」

「うわわわ、すごいよプラチナ！ 今のつてなに！？」

「物理攻撃力が1.5倍になる呪文。がんばってね」

「うん、ありがとう！！」

えらくギョンに感謝されちゃった・・・ヘンな感じ・・・

「さあ、はじめようか！」

「ああ！！」

？レイザーと14人の悪魔？とのドッジボール対決がはじまった。

第28話 G・I ゲームマスター？（後書き）

ウボォー出しちゃいました。

原作からあまりそれないようにします・・・

話を書くって難しいですね。しみじみ実感する今日この頃です。  
これからも、よろしくお願いします！！



## 第29話 G・I ゲームマスター？

ドッジボールの試合がはじまり、最初のボールはキルアのおかげでゲットすることができた。

キルアがはじいたボールをゴレイヌが受け取り、順調に相手を減らしていく。

おかしい・・・ 手加減してるのかな？

プラチナが相手の動きを見て、考えているとレイザーがゴレイヌに話しかけた。

「よし、準備OK。 お前達を倒す準備が整ったぞ」

「何だと！？ やれるものならやってもらおうじゃないか！！」

ゴレイヌはレイザーに向かって強くボールを投げたが、レイザーはボールを片手で余裕を持って受け止めた。ゴレイヌのボールは、どうやらレイザーにとって大した事はなかったようだ。

「さあ・・・ 反撃開始だ」

レイザーは念を込めてボールを、ゴレイヌに向けて投げた。

ゴレイヌはボールを受け止めることをあきらめ、自分と念獣の位置を交換し、レイザーのボールに当たることを避けた。念獣の頭にボールが当たると、頭が弾け飛び、念獣がコナゴナに砕け消えた。圧倒的な力の差を感じたからこそ、念獣がコナゴナに消えてしまったようだ。

跳ね返ったボールは、レイザーの手に戻っていった。

「ナイスリバウンド・・・なるほど、念獣と自分の位置を入れ換える能力か」

（くそ・・・このまま終われるかよ!!）

ゴレイヌが白い念獣を出し、試合を再開する。

それからは、ツエズゲラが当たり、ヒソカの念能力であてて行くが、6・7が合体しボールを受け止められた。レイザーがボールを持ち、硬をしたゴンめがけてボールを勢いよく投げた。

gonは壁まで吹っ飛んでいき、ボールは天井にめり込んでいた。ガレキから出てきた gon は、大丈夫だった。だが、額から血が出ていたので、今はキルアとゴレイヌがパスをして手当の時間を稼いでいる。

ウボォー何もしてないじゃん・・・ヒソカとしゃべってないで動けよ！せつかく出してあげたのにさ、もう言ってる！！

「コラー、そのウボォーギン！ちゃんと動かないと、しばらく出してあげないかね!!」

「おいおい、そりゃねエよプラチナ」

「一匹くらい当てるー」

「にゃんや！（あてろ!）」

「当てるだつてさ？ 応援してもらっていいじゃないか？ ボクにもしてほしいね？」

「やりやいいんだろ!? おい、ボールよこせ！ オレがする」

「真面目にやれよ？」

「わかつとるわ!!」

キルアからボールをもらったウボォーは、2に向かってボールを投げた。

「ぎゃー!!」

「よし、これでいいだろ?」

「何がよしよ! 弱いより強いのが狙いなさい、焦らされるのは嫌いなのだ!!」

「マジかよ・・・ オレこういうの苦手なんだよなあ」

「ブツブツ言ってるで、13狙えーーーー!!!」

「あいつ、キャラ変わってるのか?」

「面白いからいいじゃないか?」

「面白いのは、おめエだろ? しかたねエな、ちよつと本気を出すか」

ウボォーはゴレイヌにボールをもらい、13へと狙いを定める。

「行くぜ、オラアアア!!! ? ビックバンインパクト 超破壊拳!!!!?」

ドンーーーー!!!

13はウボォーのボールを受け止めようとしたが、ボールを持つまま後ろに吹き飛ばされていく。壁に激突して13は止まったが、ずいぶんとメリ込んだようで外からは見えない。激突した壁には亀裂が無数にはいつており、衝撃のすさまじさを物語っていた。

「これは驚いた・・・やるねエ」

レイザーもウボォーの威力に驚ろき、ウボォーに話しかけたがウボォーはプラチナと話していた。

「ウボォー!!! すごいじゃん!!! さすが筋肉バカだ」

「おめエ それは褒めてねえだろ!?!」

「にやうにやうにや！　（さすがいきんにくまんた！）」

「オレの額に肉なんて書いてねえだろうが！！」

「書いてほしいの？」

「にやうにやゝ（にくってかくゝ）」

「ちがぁー！ー！ーう」

「ボクが書こうか？」

「ヒソカ！　てめェも入るんじゃねェ！！」

プラチナ達が騒いでるうちに、ゴンの手当てが終わったようだ。

13がボールを持ったまま外野に出たので、ボールはゴンチームのものだった。ゴレイヌがボールを回収し、内野のキルアにボールをパスする。

敵は、レイザーのみ。ゴンがバックを宣言して、外野から内野へ入った。みんながゴンの動きに注目をする。

「キルア、ここに立って。腰を落としてしっかりボールを持っててね」

「わかった」

「最初はグー！！　ジャン！！　ケン！！　グー！！！！」

ドゴ！！！！

レイザーはゴンからのボールを正面から受け止めてみせた。

「な！！！！」

「この程度の威力だと、取れるんだぞ？　甘いな！！」

レイザーは、すかさずボールを投げ返す。キルアを狙うと見せかけ、ビスケ・ウボォー・ヒソカを狙っていた。ビスケの服がかすりアウト、ウボォーは油断をして腕がかすりアウト、ヒソカは外野か

らのパスを受け止めることができ内野に残ることができた。

「服も体の一部ってことだね・・・」

「油断したぜ・・・」

これでゴンチームは残るところ、あと3人。

ゴンは？<sup>レシ</sup>練？をし、練り出したオーラを全て拳へと集めた。

「最初はグー！ ジャン！！ ケン！！！！ グー！！！！」

レイザーは、前に走り出た。そして、ゴンのすぐ近くでレシーブをしボールを上にあげ、体ごと腕を引いたことで、威力を殺したようだ。

ボールが落下するまえに、ヒソカが念能力でボールを回収した。

「ダメだよ？ ボールはちゃんと取らなきゃね？」

「そうだな」

レイザーは全ての念獣を解除し、自分へと戻した。次こそ全力で来るようだ。

ゴンはレイザーの姿に触発され、さらにオーラを出し、拳へと集めた。

ゴンが撃ったボールは、レイザーによってゴンに向かって跳ね返された。ゴンは当たる寸前で気絶し、倒れこんだ。

「完璧に勝つんだろ？ ゴン？」

後ろにいたヒソカが念能力で、レイザーに向かって跳ね返した。レイザーはもう一度返そうとしたが、ヒソカ的能力によって腕が

らボールが離れず、外野まで押し出されアウトとなった。  
勝負はゴン達の勝ち。

勝っちゃた・・・ なかなかやるじゃん。 ヒソカ的能力欲しい  
なあゝゝ 便利だね

レイザーが立ち上がり、ゴンに話しかけた。ジンのことについて  
質問に答えてくれるようだ。

## 第29話 G・I ゲームマスター？（後書き）

つじつまは合っていましたでしょうか？

ずれてても、気にしないでください！！ ごめんなさいですー！ー！

## 最終話 G・I 除念師

ゴンとレイザーの話も終わり、みんなでお姉さんの案内で灯台に登り？一坪の海岸線？を手に入れることができた。ゴンがオリジナルを持ち、ゴレイヌとツエズゲラがコピーを持つことに。

「ヒソカ、本当に何もいらないの？」

「ああ、楽しかったからね？ もう行くよ？」

「これからどうするんだ？ 一緒に行こうぜ」

「キミ達はカードを集めるんだろ？ ボク達は興味が無いからね？  
何かあれば？ 交信？<sup>コンタクト</sup>で教えてくれよ？<sup>カンバー</sup>？ 同行？ か？<sup>マグネティックフオース</sup>磁石？ で飛んで行くよ？」

「そいうこと！ んじゃ、元気でね！ クーちゃん行くよ！」

プラチナはキルアの頭に乗っていたクーに声をかけた。ヒソカとウボォーは2人で話しながら先に進んでいく。キルアがクーを頭からおろして抱っこをしながら、お別れの挨拶をしていた。

「クー元気にしてるんだぞ？ また会おうな」

「にゃうにゃにゃ？ （けがだいじょうぶ？）」

「まゝ なんとかなるかな？」

「にゃうあ！ （ちよつとまっつてて！）」

クーはキルアの腕から降りると、プラチナの前に走っていく。プラチナはクーの目線に合わせてしゃがみ、話しかけた。

「クーどうしたの？」

「にゃうにゃにゃにゃう （キルアのけがなおしてちょうだい）」

「しょうがないなあゝ」



「にやにや！（おねがい！）」

立ちあがったプラチナは『ヴァルキリー』から？プライム・エリクス（体力が99%回復）？を出し、クーに薬を渡してから、先にヒソカ達のとこへ行くと言って歩いて行った。クーは薬をくわえてキルアのとこへ戻って行き、薬をキルアの足もとに置いて念字で話しかけた。

「にやうにや（お薬飲んで）」

「ハンター試験の時、クラピカに飲ませたヤツか？　ありがとうな」  
「にやうにやにやにやうにやう（プラチナがだしてくれたんだよ）」

「クーが頼んでくれたんだろ？」

「にやゝにやにや！（えへへ）ちゃんとのんでね！」

「おう、マジでありがとう」

キルアが薬を飲むと、ヒドイ怪我をしていた両手があつという間に完治していく。クーはキルアが薬を飲んだのを見てから、プラチナのもとへと走って行った。

クーが急いで外に行くとプラチナは設定を元に戻して、ウボォーの肩に座り、ヒソカは？<sup>「コンタクト」</sup>交信？でフィinksと話している。クーがウボォーの体を登って、プラチナの膝に乗った。

「おかえりクーちゃん、フィinksが今から迎えに来るんだって」  
「にやうにや（そうなんだ）」

「除念師が見つかったらしいぜ？　おっ　来たぞ」

フィックスが飛んできて、ウボォーを見て驚いた。

「よう、ウボォー!!! お前出てたのかよ、久しぶりだな!!!」

「おう!!! おめエは元気そうだな」

「ああ。 よし、それじゃ行くぞ ? 同行?<sup>カンパニ</sup>使用!<sup>オン</sup>!!」

飛んで行った先には、シャルナーク達が待っていた。みんな、ウボォーがいるのに驚き再会をよるこんで話している。だけど1人だけ、ウボォーの肩から降りたプラチナに抱きつくのがいた。

「プラチナー!!! 変態<sup>ヒソカ</sup>に何もされてない? 見たところ怪我

もないようで良かったわ。 マチとノブナガも心配してたわよ。 顔見せに行きましょう」

「うん、楽しかったよ? ウボォーとヒソカがね、ドッジボールしたんだ」

「にやうにやうにやう (ヒソカがいとつよかったよ)」  
「へえ」 あいつも役に立っただんだ・・・」

パクノダと手をつないで歩いてると、マチ・ノブナガ・ヒソカ・知らない子が見えた。

ヒソカ達は、除念師について話していた。知らない子はカルトという名前で、ヒソカの抜け番なんだってさ・・・ 変態の次は女装趣味!? 似合ってるからいいけど、4番って変な人しかなれないのかな? 旅団ってこれから大丈夫かな・・・

ヒソカは除念師と交渉に行くので、プラチナはパクノダ達と一緒に留守番することに。

動き始めたヒソカに、プラチナはキルアにあげたのと同じ薬を投

げた。

「ボクにくれるのかい？」

「試合がんばってたから、ご褒美だよ」

「ありがとう？ 指が使えないのは不自由だから、嬉しいよ？」

「いつてらっしょい」

「ふふふ？ またね？」

ヒソカを見送り、とりあえずみんなでご飯を食べることに。

久しぶりの手料理だ！！ パクのハンバーク美味しいんだよ

ヒソカは交渉に成功。除念師の爆弾魔<sup>ボマー</sup>にかけられていた念も、無事に解除することができた。プラチナはヒソカと一緒にゲームを出て、除念師をクロロに会わせることに。

ヒソカは、クロロと闘うのが今回の報酬だからね。ちゃんと見えないと心配・・・ いざっていう時は？ プライム・エリクサー？ で全回復できるし、もしも、どっかが死んだら、エインフェリアにすればいいだけだから大丈夫！！

ゲームを出て、除念師と待ち合わせ中。。。

クロロの除念が終わるのもあと少し、やっと復活できる。除念が終わればヒソカとの闘い。そしてその次は・・・ 何があっ

ても、プラチナはクロロと一緒にいると心に決めた。

神に愛されたプラチナは、『ヴァルキリー』の能力を使って自分の好きなように、神が迎えにくるまでずっと旅団のみんなと過ごしていくのだった。

## 最終話 G・I 除念師（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございます！！

G・Iで終わり、キメラアントには入らないことにしました。

初めて小説を書き、たくさんの方々にお気に入り登録してもらえて嬉しかったです。中途半端に投げ出さず、最終話まで書けたのは皆様のおかげです！

番外編も書こうかと思っています。

時間をつくって、次回作にも挑戦しますので、よろしくおねがいします^^

ありがとうございました

番外編 蜘蛛と桃の節句（前書き）

お久しぶりです。

お雛様を飾っていて、思いついたので書きました。

## 番外編 蜘蛛と桃の節句

プラチナがハンター試験を受ける前のこと。

旅団は、全員で日本へ行くことに。今回の目的は、江戸時代から<sup>クモ</sup>伝わるという？不死者の巻物？を奪取することだ。情報収集は、パクノダ・シャルナーク・フェイタンが行った。

巻物は、城の奥に隠されていることが分かった。プラチナが警備員の場所を調べ、クロロが指示を出すことで、スムーズに終わることができた。警備員の中には、根性のある奴もいたがウボォーの力比べにはかなわなかったようだ。

目的は果たしたので、アジトに戻り打ち上げをすることに。酒を飲み、ご飯を食べ、好きなように盛り上がるなか、シャルナークが全員に聞こえるよう大きな声を出した。

「はいはい、今から？桃の節句？をはじめます！」

「なんだそりゃ？」

ノブナガが質問をすると、日本で情報収集をしたときに知った？桃の節句？について簡単に話した。女の子のお祭りで、雛人形を飾って、甘酒を飲んで、雛あられを食べる。

シャルナークは説明しながら、甘酒をコップにつき、全員に渡していく。

「女の子の大事なお祭りらしいから、プラチナのために雛人形も用意したわよ？」

「あられもあるね」

パクノダが豪華な雛人形を出し、フェイタンがあられをプラチナに渡した。

あられを受け取ったプラチナは驚き、甘酒を持って固まっている。

「みんな甘酒あるよね？ それじゃ、プラチナが素敵な女性になりますように！ 乾杯！！」

「」「乾杯！！」「」

あられをガリガリ食べながら、プラチナは甘酒を飲む。

ヒソカが隣で、甘酒がなくなったらついでくれる。5杯目を飲んだころには、プラチナの目はトロンとして、顔もほんのり赤くなっていた。

「大丈夫かい？」

「うへへへ、げへへへ・・・」

「うゝん？ 危ないね、もうだめだよ？」

「あい・・・ ヒシヨカ？」

「なんだい？」

ヒソカは、プラチナが酔ったのを感じ、甘酒を勧めるのをやめる。プラチナが呼ぶので、近寄り顔を覗きこんだら・・・

ガブリ！！！！

「うぎゃ???!」

「ガジガジ~~~~」

「プラチナ！！ ヒソカなんか かじったらお腹壊すよ?!」

「そっという問題か？」



シャルナークは、クロロにつっこまれながら、ヒソカからプラチナをはがし、抱きかかえフェイタン達のところへ移動する。かじる物がなくなったプラチナは、シャルナークの服をかじっていた。そんなプラチナに、ウボォーが話しかけた。

「お前、大丈夫か？ 顔が真っ赤だぞ、暑くないか？」

「・・・ あちゅい？」

「おう、暑くないか？」

「しゃるなーく、ぬげー！」

「ええ！！ なんで僕なのさ？！ ちょちょちよつと待って、ぎゃゝゝゝ！！ お嬢に行けない！！」

「ガッハッハッハ！ プラチナ頑張れよゝゝ」

「あい！！ ぬがすです！！」

「止めてくれよゝゝ フェイタンにパス！！」

「うにやらあ！」

「！！！」

シャルナークは半裸の状態になりながら、服を剥いでくるプラチナを横でマイペースに酒を飲んでいるフェイタンの膝に投げ渡した。変な声をあげながらフェイタンの膝に座ったプラチナは、驚くフェイタンの顔から順に下までマジマジと見つめる。

「なに？」

「ぽーくびつつ？」

「！！！」

「?! のわああゝゝゝ！！」

暴言を吐いたプラチナを、フェイタンは投げ飛ばした。

ゴン！！

クロロの前に、頭から着地する。

頭を抱えて悶えるプラチナに、クロロは呆れて声をかけた。

「プラチナ、言って良い事と悪い事があるんだぞ」  
「うう~~~~」

クロロはプラチナを抱えて、背中をトントンしながら話す。

「ほら、フェイタンに謝れ」  
「あい、ごめんなさい・・・」  
「・・・次は許さないね」  
「もうしましえん！」  
「気を付けろよ。さあ、もう寝ろ」

プラチナの目はだんだんと閉じられていき、やがて寝息が聞こえてきた。

「かわいいね？」  
「ヒソカ、静かにしろ」  
「はいはい？」

プラチナがクロロの膝で丸まって眠り、起きないと感じると旅団たちは酒を飲みはじめた。

にぎやかな雰囲気で飲んでいると、プラチナがゴソゴソと動いた。

「うにゃ~~~~」  
「寝てろよ」  
「んん・・・ フランクフルト~~~~」

「!？ ヒソカお前だろ・・・ プラチナに変な事を教えるんじゃない」

「くくくく？ 面白いじゃないか？」

こうして、ドタバタしつつも？桃の節句？は終わった。

番外編 蜘蛛と桃の節句（後書き）

今日でプーちゃんは卒業です。

頑張って働いて、息抜きに小説を書きます。

これからも、よろしくです。

誤字があれば、教えてください。

お知らせ

皆さま、お久しぶりでございます。  
お知らせです。

ハンターハンターの番外編を考えているうちに、幽遊白書の2次小説を書きたくなってきまして。  
挑戦する事にしました！

思いつき見切り発車！？　かもしれませんが、よければ読みに来てくださいです。

今回は、ヴァルキリーのキャラを召喚するのではなく、初期の旅団メンバー+ヒソカを召喚できる事にしています。ゴンとかはできません。

なおかつ、プラチナは幽助の双子の妹になり、なまえが雪姫となっています。

幽白とハンターのコラボ番外編も書けたらな　と考えています。

やりたいことたくさん。

いっぱい挑戦していきますので、よろしく願いします

今のところ、原作を大切にしようと考えてます。

予定は未定という事で・・・

では

ハンターハンターの番外編も合間に投稿しようと計画中、お待ちください！

番外編 お花見 ? (前書き)

お久しぶりです

## 番外編 お花見 ？

さくら ひら〜ひら風に舞い降りて〜  
揺れる 思いのたけを抱き寄せた〜

最近のプラチナは、ご機嫌な様子で歌をよくうたっている。  
日本に仕事で行ったときに聞いた歌が、頭からはなれないようだ。  
そんなプラチナの様子を見たマチが、パクノダにある計画を相談する。2人はプラチナを驚かすために、他の団員にも協力を要請し、プラチナに気付かれないように水面下で準備をはじめた。

マチとパクノダが考えた計画は、プラチナがよくうたっている歌詞にある桜でお花見をすること。仕事があつた時の日本は、？お花見？という宴会をする季節だったので、よく桜が咲いている下で宴会をしている日本人を見かけた。プラチナがそんな盛り上がる日本人達を羨ましそうに見ていたのをマチは覚えていたのだ。マチとパクノダは計画を実行するにあたり、具体的に内容を練っていく。自分たちでは実現するにしても限界を感じ、団長に相談することに。

「団長、出来そう？」

「・・・無理ではない。ただし、全員の協力が必要だな。」

「それなら大丈夫よ。プラチナの為なら、協力してくれるって言うてたわ」

「そうか。ウボォーとノブナガは宴会に魅かれたんじゃないのか？」

「ビンゴ！」

「それでは、準備を始めようか。皆を集めているのだろう？」

「ああ、団長頼むよ」

クロロを先頭に、マチとパクノダは団員達が集まる部屋へと移動する。

部屋に集まっていた団員へクロロは計画に必要な物を、誰が何を準備するのか指示をしていく。それを聞いた団員達は、行動を開始しはじめた。

団長の指示で、会場の準備をまかせられたのは、ウボオーとノブナガだ。

2人はホームの近くにある森にやって来ていた。

「おい、さっさと終わらそうぜ」

「おう！！　いくぞ、ハアアアアアーーーーーアアアアアア！！！！」

ドゴゴオオオオオオーーーーーオオオオオオオンン！！！！！！

「ヒュ、相変わらずの威力だな」

ノブナガは、ウボオーがビックバンインパクトでつくった大穴を見下ろして感想を言っていると、穴の中心にいるウボオーが話しかけた。

「おい！！　さっさと終わらすんだろーが、お前も働け！！」

「わかってるっつーの！！」



穴の中に飛び降りたノブナガは、斜面に向かって立ち愛刀を抜刀し、一閃する。すると、斜面が崩れ階段ができていた。

「こんなもんだろ」

「てめえ、器用だな」

「さっさと帰るぞ、団長に報告だ」

「おう！」

会場ができたその頃、マチとパクノダは宴会で食べる料理を調達し、フランクリンとシャルナークは飲み物の準備をし、フェイタンとフィンクスは日本から畳を盗ってきていた。桜の準備はクロロとコルトピがしていた。取り寄せた桜の木を会場に運び、クロロが指示した場所にコルトピがコピーをしていく。こうして、ウボォーとノブナガが準備した会場は、桜の木でいっぱいになり、中央にフェイタン達が盗ってきた畳を敷いていく。フランクリンが酒を運び、マチとパクノダが料理を運び、シャルナークが桜を照らすライトを設置したことですべての準備が完成した。

団員が忙しく準備をしている間、プラチナは何処にいたのかというと・・・

「ねえねえ、イルミって今は家にいるかな？」

「うん？ どうしてだい？」

「クロロにね、手紙を渡してほしいって言われたんだ」

「そうなんだ、ちょっと聞いてみるよ？」

「ありがと」

クロロにお使いを頼まれていた。

「もしもし？ プラチナがキミに会いたいんだってさ？」

「・・・間違ってないけど」

「ふーん、そうなんだ。じゃあ、キミの家でまってるよ？ また後でね？」

「イルミのお家に行くの？」

「そういうこと？ じゃあ、行こうか？」

「ヒソカもくるの？！」

「もちろん？」

「1人でいけるもん！」

「ふふふ？ ダーメ？」

「うきやつっ」

「出発だね？」

1人で行こうとしたプラチナは、ヒソカの念能力につかまり、一緒にイルミの家に行くことになった。

旅団所有の飛行船に乗って、ゾルディック家に直接到着。

飛行船から降りたプラチナとヒソカを、執事のゴトーとゼノにシルバが迎えた。

「久しぶりじゃの、元気にしておったか？」

「うん！ ゼノおじーちゃんも元気に殺ってた？」

「もちろんじゃ、最近は骨のある奴がおらन्दの、汗もかかんわ」

「へえー、そうなんだ」

「親父、立ち話もなんだ、中へ入ろう」

「そうじゃの、付いてこい」

「はい」

「？」

中に入ったプラチナ達は、イルミが戻ってくるまでの間、一緒にゾルディック特製（毒入り）のお茶を飲んだり特製（毒入り）ケーキを食べたりしていた。

お茶を飲んでいたゼノが、いつもプラチナと一緒にいた黒猫がいないことに気付き話題にした。

「黒猫はどうしたんじゃ？」

「そういえばそうだね？」

「クーちゃんはね、最近恋人？ ができたんだよね・・・」

「さびしいのう」

「うん・・・」

プラチナのテンションが下がったことで、雰囲気が暗くなったその時、部屋の扉をノックする音が聞こえてきた。

「なんじゃ、入れ」

「失礼いたします。イルミ様がお戻りになりました」

「帰ってきたの?!」

「はい、ただ今こちらに向かっておられます」

「迎えに行くー!!」

プラチナは玄関までイルミを迎えに行き、クロロから頼まれた手紙を忘れないうちに渡した。イルミが手紙を受け取り、内容を読むとそこに書いてあったのは・・・

「ふーん」

「？ なんて書いてあったの??」

「招待状」

「招待状？」

「知らないんだ？」

「????」

「なるほどね？」

「どれどれ、ほうそういうことが」

「手土産を用意しておけ」

「承知いたしました」

こうして、プラチナの知らないうちに？お花見？に参加するメン  
バーが賑やかになっていく。

「そろそろ帰ろうか？」

「???? うん・・・」

「いくよ」

イルミ、ゼノ、シルバ、ゴトーを連れて、プラチナとヒソカはホ  
ームに戻っていった。

もうすぐホームに着くとき、ヒソカがクロロに電話をした。

「もしもし、ボクだけど？」

『着いたか』

「ピンポン、おまけが4人付いてきてるよ？」

『問題ない・・・プラチナに変われ』

「はいはい？ プラチナ、クロロだよ」

「もしもし？」

『にゃー』

「クーちゃん!？」

『戻って来ているぞ。』

今はホームではなく外にいる。

場所はヒ

ソカが知っている』

「うん、わかった」

「それじゃ、こっちだよ？」

イルミ達を連れたプラチナは、ヒソカに案内されて会場に到着した。

そこは、何十本もの桜がライトアップされ、とてもきれいな景色がひろがっていた。

「……………」

驚き、喜ぶプラチナを見た団員達は、計画が成功したことを喜び宴会をはじめたことにした。

『乾杯……………!』

番外編    お花見    ? (後書き)

思いのほか、長くなったので途中で区切りました。  
次回は、宴会のようすを書く予定です。

頑張ります！

週末しか書けない状態ですので、気長にお待ちくださいませ。

番外編    お花見    ？

はじめましてかのう？

ワシはゼノじゃ。長生きはするもんじゃよ、旅団と宴会をする日が来るとはのう。

これもプラチナのおかげじゃな、カワイイ奴じゃよ。

宴会がはじまり、プラチナは花より団子になっているようじゃ。まだまだ子供だから仕方がないのかもしれないのう。

ゼノが？さくら？を見ながら日本酒なるものを飲んでいると、クロクが酒を片手に近づき声をかけた。

「ご老体、飲んでおられますか」

「心配せんでも、飲んどるわい」

「そうですか」

「今日はワシらも参加してよかったのか？」

「あいつは、大勢の集まって食べるのが好きですから」

「そうか」

「ええ」

2人が飲みはじめると、シルバがゼノの様子を見にきた。

「親父、飲みすぎるなよ」

「ふん、年寄り扱いをするんじゃない。まだまだ、大丈夫じゃ」

「飲みますか？」

「もらおう」

「ほれ、ここに座るんじゃない」

3人が一緒に飲む姿をプラチナとクーが見ていた。

クーは彼女に振られたようで、プラチナにひつつきツナサラダを食べている。プラチナは、そんな甘えてくるクーを撫でながらピザ・パスタ・唐揚げ・ポテト・3色団子を食べていた。

「クーちゃん、あの3人組が暴れたら大変だね」

「にゃーにゃう（にぎやかになるねー）」

「プラチナ、ジュースのおかわりいるかい？」

「いるー、オレンジジュースがいい」

「はい？」

「・・・ヒソカ変なの入れてないでしょうね」

「毒なんか入れてないよ？」

マチがプラチナのコップに入っていたジュースが無くなったので、声をかけっているとヒソカがやって来てタイミングよくオレンジジュースを持ってきた。マチはヒソカがジュースの中に何か入れているのではないかと疑い、クーに毒が入っていないか確認してもらうことにした。

「クー、毒は入ってないか？」

「クンクン にゃう（毒は入ってないよー）」

「そうかい、ありがとう」

「飲んでいいの？」

「ああ、いいよ」

「やった」

「？」

ゴクゴクゴク・・・ ぷはう



・・・ ひつく

・・・ ひつく ひつく

オレンジジュースを飲んだプラチナの顔が赤らみ、しゃっくりをしはじめた。

目がトロンとし、ボくっとしている。クーが呼びかけるが、返事をせずにヘラヘラと笑っている。

・・・ 誰だ、プラチナに酒を飲ませたのは。

いち早く変化に気が付いたクロロは、プラチナが暴走する前に避難をすることにした。

「ご老体、場所を移しましょうか」

「ふむ、プラチナが原因かのう？」

「確かに、さつきから様子が可笑しいが」

「ええ、あいつは酔うと危ないので先に避難をしましょう」

「そうじゃの、高みの高みの見物でもしようかのう」

「親父・・・」

3人がコッソリと移動を開始しはじめた時、プラチナの目があやしく光った。

キラン？

うつすらと笑みを浮かべたプラチナが立ち上がり、動きはじめた。クーはもう自分ではプラチナの行動を止める事はできないと感じ、

クロロの元へと避難していく。

（みんな　がんばるにや〜）

初めのターゲットは、ほそマッチョで金髪なあの人。

滑らかに？絶？をして、背後から忍び寄るハンターなプラチナは狙いを定めて襲いかかった。

「ぎゃっつ、もうなんだよプラチナ、ビックリするじゃないか！」

「クンクン　クンクン」

「・・・　何、どうしたのさ」

「シャルル　ええ匂いするねえ」

「えゝ！？」

「んふふ〜　ガブツ」

「ちよっつ　やめろって　いってえー！ー」

「抜けたー　んにや〜」

「はっ、この匂い！！　誰だよプラチナにお酒飲ませたのは！！！」

アレはもうダメね、ワタシ避難するね

プラチナの餌食となっているシャルナークを見捨て、フェイタンはコッソリと高みの見物をしている団長の近くへと避難していった。哀れシャルナークは、頭に十円禿が出来たところにやっと解放される。

戦利品である、シャルナークの髪を持ったご機嫌な様子のプラチナ。

キラリ？

あやしい笑みを浮かべるプラチナの餌食にならないよう、前回の惨劇を覚えている団員達は避難していく。そんな中、ヒソカの話聞いていてプラチナから背中を向け、騒ぎに気が付いていないのが一人いた。黒髪が素敵な、あの人だ。

ふふふ？ 上手い事いったみたいだね

後は、近づいてくるプラチナをイルミに気付かれないようにしないよね？

「ヒソカ 話の続きは？」

「？」

「どうしたのさ」

「後ろ？」

「？」

ヒソカに言われて後ろを振り向くと、プラチナが微笑みながら立っていた。

??? 意味が分かない

プラチナに声をかけようとしたその時、プラチナが俺の髪を触ってきた

撫で撫で      サラサラ――

プラチナがイルミを餌食にしようとしたその時、2人の間に割って入った人物がいた。

背後から近づいていたのは、ゾルディック家の執事のゴトーだっ

た。

これは危ない予感がします。イルミ様をお守りせねば!!

「プラチナ様、もう遅いですし寝ませんか？」

「うにゃ〜？ もう寝るの？」

「そうですよ、眠くないですか」

「う〜ん・・・ねる〜」

「そうしましょう」

「う〜 Z Z Z Z Z Z」

おお〜〜〜!!!

さすがはゾルディック家の執事。

暴走しはじめていたプラチナを、抱っこするとものの2分もしないうちに、寝かしつけてしまった。

「残念？」

「・・・？」

ヒソカはイルミを驚かそうとしたが、ゴトーに計画を狂わされ、成功しなかったことを残念に思っていた。そんなヒソカや、プラチナを抱っこして寝かしつけているゴトーを見ても、何があつたのかよく分かってない鈍感なイルミが1人不思議そうな顔をして、酒を飲む。

高みの見物をしていた3人は、物足りなく思いながらも、酒を飲むことに。クロロはゴトーからプラチナを受け取り、自身のコートにくるんで膝枕をし、寝かせる。

こうして、静かになったプラチナに安心し、宴会は心おきなく盛り上がっていくのでした。  
おしまい！

次の日、二日酔いに頭を抱えるプラチナの姿が見られましたとさ

番外編    お花見    ? (後書き)

ぐだぐだ感が、すさまじいです。

更新が遅くなったのに、こんなのですみません!!

しかも、もう桜が葉桜になってるし・・・

次回の番外編は、海をテーマにしようかなあ〜と考え中です。

それでは、誤字脱字があればご指摘お願い致します!

これからもよろしくです!

## 番外編 七夕？！

ノブちゃんが変な植物を引きずって帰って来ました。

「おい、プラチナ！ もうすぐ七夕だからな、願い事をこの紙に書いて、この笹の葉に飾ると願いがかなうぞ！」

「?? 願い事？ 七夕だから願いがかなう？ なにそれ・・・」

ノブナガの説明に困惑していると、ちょうどホームにいた団員が集まってきた。

「何だ何だ?!」

「桃の節句に続いて七夕ってものジャポンのお祭り？」

「書いたらかなうね、誰がかなえてるのか不思議ね」

「織り姫？ 彦星？ だかそんな奴らだったような・・・」

「??? 誰それ」

上から順番に、フィンクス・マチ・フェイタン・ノブナガ・プラチナが話している。

「団長なら詳しく知ってるんじゃない？」

パクノダの提案により、みんなの視線が1人読書に励んでいた団長に集まった。

「クロロ、七夕って知ってる？」

プラチナが聞くと、クロロは面倒くさそうに一冊の本を取り出し、近くにいたパクノダに投げ渡した。

「七夕について書いてあるやつだ、読めばわかる」

そう言って、自分は読書にもどった。

そんな本まで持ってたんだ・・・

とりあえず、自分で読むのはめんどくさいから、パクに読んでもらおうと。

「パク読んで」

「そうね、みんなはどうするの？」

プラチナ以外のメンバーに聞くと、意外と？七夕？という祭りが気になるのか笹を壁に立てかけ、話を聴く態勢をとった。

プラチナは、パクの膝に乗せてもらい、一緒に本を見ながら読んでもらうことに。

『七夕』　　く本当は怖い話く

むかしむかし、あるところに織り姫という　それは可愛らしいお姫様がいました。

織り姫は自分の可愛い容姿を利用し、働かず好きな事ばかりして過ごしていました。



父親は織り姫を溺愛しており、働くようには言わず自分から率先して甘やかしていました。

すると、母親はそんな2人に呆れて、家を出て行ってしまいます。

一家の稼ぎ頭は母親だったので、さあ大変です。

あつという間に、贅沢をするためのお金が 底をついてしまったのです。

このままでは織り姫を甘やかす事ができないと考えた父親は、お金を持っている人から貰うことにしました。

貰い方は簡単。 お金持ちの家を訪ね、自白剤の入ったワインをごちそうします。

薬が効いてきたところで、お金や貴金属を保管している場所を聞き出し、回収した後は持ち主を殺してから家に帰ります。 もちろん屋敷の使用人も全員始末をし、屋敷全てを燃やし証拠は何一つ残さないようにしました。

何件かやるうちに、父親は強くなっていきました。

今日もひと仕事を終えて、プレゼントを持って家に帰ってくると、織り姫の部屋から若い男の声が聞こえてきたのです。

「彦星もうだめだわ、お父様が帰ってくるもの」

「織り姫、そんな切ない事を言わないでくれよ。 夜はこれからだろ？」

織り姫の艶めいた声を聞いた気がした父親は、部屋に突入したのです。

「織り姫！！　コレは一体どういうことだ！！」

彦星は驚き、織り姫から離れました。

織り姫は、父親の剣幕に驚きながらも嬉しそうに声をかけました。

「お父様、いいところに来て下さいました？」

「どういうことだ？」

「7月7日、今日は私の誕生日？　ぜひともやってみたい事があったんですけど、私ひとりでは無理でしたの。だから、お父様をお待ちしていました？」

織り姫は、腰が抜けて動けない彦星を残して、父親の元に行き耳元で囁きました。

話を聞いた父親は、とたんに機嫌を直し、微笑みながら彦星に近づいたのです。

「な、な、なんですか！　わああっつ」

彦星は大した抵抗もできずに壁に押し付けられ、両手足を壁に隠してあった皮の拘束具で動きを封じられたのです。

織り姫はナイフを片手に、機嫌良く彦星の服を切り裂いていきます。

「お、織り姫?!」

彦星が顔を真っ青にしながら、自分につこりとほほ笑む織り姫に、どういふことなのか説明を求めました。

すると、織り姫は机からいろいろな道具を取り出し、そのうちの一つを持って彦星に近づきながら話し始めました。

「私ね、一度試してみたい事があったの。女の人で試した事があったのだけど、男の人はまだ試した事が無いのよ? それと、後始末が大変だからお父様にはもうダメって言われてたの。でも、どうしても試してみたくてね? 誕生日プレゼントの代わりに今日は特別に許してもらえたわ?」

困惑する彦星に、織り姫の父親が話しかけました。

「君も運が悪かったと諦めるんだね」

「さあ、楽しませてね? 痛くないように麻酔をちゃんとしてあげるから?」

その後、織り姫の部屋からは若い男性の声が響いてきました。それを聞いた住人は、またあの家かと怯え、戸締りをしっかりと何となくこえなかったかと思ひ込むようにし、その日の事を記憶から消してしまいました。

数日後、誰かもわからない若い男性の無残な遺体が山奥で発見されたそう。

男性の遺体は、腹が捌かれて引きずり出された内臓を首にリボン結びをされていたり、刃物での切り傷、焼け爛れた右腕、骨がむき出しになっている左腕、ノコギリの様な物で切断された両手首に足首、顔には無数の様々な形の針、お尻の肉は削ぎ落とされ、乳首は噛み切られた跡があったそう。……

7月7日は、ある女の子の誕生日で、笹に願いを書いて飾ると、まれに願いがかなうようだ。しかし願いをかなえてもらうためには、若い男性の生贄が必要であり、また、女の子とその父親が納得する美しさを兼ね備えていなければならないそう。

願いをかなえたいあなた、準備は大丈夫でしょうか。

間違えるとあなたが生贄となり、願いをかなえる事はできないでしょう。

おわり

…… やだ、何この話 呪われそうなんですけど。

「いいね、でも、もうすこし詳しく書いてほしかたね」

「ノブナガ、なにをプラチナにさせようとしてるんだい？」

「えゝ?! ちょっと、俺が知ってるのはこんなんじゃないぞ?！」  
「お祭りでは無かったわね・・・」

こうして、七夕はプラチナの育上よくないという事で中止となり、ホームの屋上からは簀巻きにされたノブナガがぶら下げられた。

コレ以降、無暗やたらにジャポンのお祭り? をすることは無く、事前にシャルナークが調べパクノダがOKを出したものを、するようになりました。

おしまい。

番外編    七夕?!    (後書き)

七夕が好きな方、すみませんでしたああ――――

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8798p/>

---

白銀の女神にごちゅうい！

2011年7月5日18時14分発行